

授業ビデオ教材発刊によせて

全国聾学校長会会長（東京都立中央ろう学校長） 鈴木茂樹

この度、NPO法人大塚クラブのご尽力で、郵便事業株式会社の年賀寄付金配分を受けて、指導者用教材DVD制作事業に取り組むことができました。まず、このことに対してお礼を申し上げます。

さて、学校教育は一日の活動全てが学習といって差し支えなく、いつの時代にあっても授業の質が問われています。各学校では、専門性を維持するために懸命に取り組んできましたが、2007(H19)年に特殊教育が特別支援教育に、そして聾学校が聴覚障害教育部門としての位置付けに切り替わったのを機に、今まで以上に、授業展開に焦点を当てた教材を必要とするようになりました。この課題に 대응していくために、都立ろう学校及び全国聾学校、関係者の協力を得て、全国規模で授業ビデオ教材の作成に取り組みました。今回の取組みは、この教育が始まって以来のことになると思います。何はともあれ、関係者にとっては待望の教材の完成となりました。改めて、子供たちの可能性を引き出すことを願い、ボランティア精神で授業準備を進めていただいた先生方、出演した幼児児童生徒、保護者ほか多くの関係の皆様へ感謝いたします。

教育実践上の問題解決に向けた取組みは、1878(M11)年の京都盲啞院の創設以来、全国各地で行われてきました。第1回全国聾啞大会が1906(M39)年に東京で開催され、更に、戦後は1946(S21)年の月刊誌「聾教育」(現在「聴覚障害」)に始まり、盲・聾教育研究大会が1951(S26)からそれぞれ独立して全国聾教育研究大会、1967(S42)年の第1回全日本聾教育研究会と続きました。2006(H18)APCD「アジア太平洋地域聴覚障害問題会議・第40回全日本聾教育研究大会(関東大会)」の大会主題が「聴覚障害教育の専門性の継承・革新・共有」であったように、この教育の研究が始まって100年以上経ってもなお「専門性の維持・継承」がテーマとなっています。

現在、各学校では、この教育が積み上げてきた指導方法や授業力向上の取組みを踏まえて、授業研究を行っています。また、全国聾学校長会も、1990(H2)に教員用研修テキストを刊行し、今年第5訂版を数えますが、言うは易く行うは難しのとおり、授業力が一定の水準に達するまでにはかなりの時間を要します。

とりわけ、初任者や異動者が、初めて聴覚に障害のある子供たちに接する時、コミュニケーションや授業展開でどのような配慮が必要なのか分からず、また、指導案や指導書などを見ても、経験がない者にとっては手掛かりが少なく、困ることが数あると思います。次に、一定の指導技術を身に付けた教師にとって、モデルとする先輩が身近にいない場合もあります。

この課題を解決するために正面から取り組んだものが本授業ビデオ教材です。内容は3巻構成になっており、コンセプトは、新しく着任した教師が聴覚障害についての全体像を知ること(第1巻)、実際に授業をしていく上で配慮すべき事柄(第2巻)、指導力に定評ある先生方を参考にして各自の授業力向上に資すること(第3巻)、です。

各学校並びに関係の皆様におかれましては、授業ビデオのチャプターを参照してWEB上で1単位時間の授業をご覧いただき、研修並びに教材等として有効に活用していただければ幸いです。

## － 目 次 －

### DVD第一巻 聴覚障害児教育の基礎知識

1. 耳の仕組みと3つの難聴
  1. 音とは 5
  2. 耳の構造について 7
  3. 伝音難聴、感音難聴、混合難聴 9
  
2. オーディオグラムを読めるようになろう
  1. オーディオグラムの表記法 10
  2. 平均聴力レベルについて 11
  3. 気導と骨導 12
  4. 代表的な音の大きさについて 13
  5. 障害者手帳の等級基準 14
  
3. さまざまなコミュニケーション
  1. コミュニケーションとは 15
  2. 言語によるコミュニケーション 15  
音声言語によるコミュニケーション 16  
聞き取りやすい話し方 17  
音声言語を補う手段 18
  3. 手話・指文字によるコミュニケーション 20  
3つの手話 20  
指文字 20  
手話のもつ多様な価値観 21  
トータルコミュニケーション 21
  
4. 言語獲得について
  1. 自然言語とは 22
  2. 言語（言語の諸側面）のどこに誤りが生じるのか 23
  3. ことばの指導のポイント 24
  4. 言語獲得が遅れることによる影響 25
  
5. 補聴器の基本
  1. 補聴器の構造と種類 26
  2. 補聴器の基本的な機能 27
  3. 補聴器管理の基本 28
  4. 補聴器の段差 29
  
6. 補聴器の限界を補うために
  1. 補聴援助装置の活用 30
  2. 視覚的情報保障で気をつけること 30
  
7. 人工内耳
  1. 人工内耳 31
  
8. 発声・発話の基本
  1. 発声器官 32
  2. 母音・子音と調音点 32
  3. 調音様式と有声・無声 33
  4. 音韻意識を育てる 33
  
9. 読み書きことばと手話
  1. 読み書きことばと手話 34
  
10. 障害の受け止め
  1. 障害受容と障害認識 35
  2. 自己受容と社会受容 36
  3. 障害認識に関して 36

11. 聴覚障害者の進路・職業問題

- 1. 採用後の課題 37
- 2. 企業から望まれる能力 37

12. これから聴覚障害児にかかわる先生方へ 38

## DVD第二巻 教育現場での工夫・配慮事項

- 1. 教室環境 (1) 机の配置 (馬蹄形) 41
- 2. 教室環境 (2) 掲示物 42
- 3. 教室環境 (3) 補聴器 44
  
- 4. 話し方・やりとり (1) 話している姿をはっきり見せる 46
- 5. 話し方・やりとり (2) 視線を引きつける 48
- 6. 話し方・やりとり (3) わかりやすい話し方 50
- 7. 話し方・やりとり (4) 言葉の使い方に気を付ける 52
  
- 8. 教材・教具 (1) 実物・文字カード・写真 54
- 9. 教材・教具 (2) 文字カード・絵カード・お面 56
  
- 10. 板書の工夫 (1) 1. 板書の工夫 58
- 11. 板書の工夫 (2) 2. 色使い・図表化 59
- 12. 板書の工夫 (3) 3. 板書計画 60
- 13. 板書の工夫 (4) 4. PDPの使用について 62

## DVD第三巻 実践事例ダイジェスト

- 事例1 福島県立聾学校 幼稚部3年 話し合い活動 65
- 事例2 福島県立聾学校福島分校 小学部1年 国語 65
- 事例3 茨城県立霞ヶ浦聾学校 小学部1年 国語 おはなしだいすき 66
- 事例4 群馬県立聾学校 高等部3年 物理Ⅰ 光は波なのか 66
- 事例5 埼玉県立特別支援学校坂戸ろう学園 小学部1年 算数 くり上がりのたし算 67
- 事例6 東京都立大塚ろう学校 小学部4年 音楽 和太鼓 67
- 事例7 長野県長野ろう学校 幼稚部3年 学級活動 読みがたり 68
- 事例8 愛知県立千種聾学校 幼稚部1年 朝の会 68
- 事例9 三重県立聾学校 小学部2年 国語 69
- 事例10 奈良県立ろう学校 高等部2年 日本史B 尊王攘夷から倒幕へ 69
- 事例11 和歌山県立和歌山ろう学校 小学部6年 自立活動 発音矯正・言語学習 70
- 事例12 福岡県立小倉聴覚特別支援学校 小学部1年 国語 じどう車くらべ 70
- 事例13 福岡県立福岡聴覚特別支援学校 幼稚部1年 劇あそび 71
- 事例14 福岡県立久留米聴覚特別支援学校 幼稚部3年 総合療育保育 かがみびらき 71
- 事例15 東京都立大塚ろう学校 小学部2年 国語 お手紙 72
- 事例16 東京都立大塚ろう学校 幼稚部2年 保育 さつまいもでつくろう 72

## DVD第1巻 聴覚障害児教育の基礎知識



このDVDは、はじめて聴覚障害児を対象とした特別支援学校や特別支援学級および通級指導教室の先生になられた方のために作成されたものです。

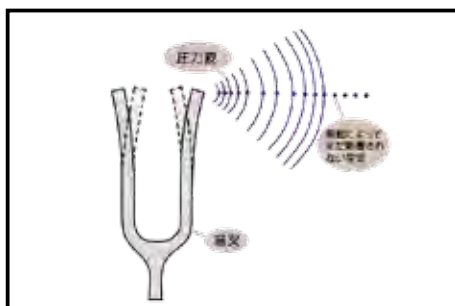
聴覚障害の特性や聴覚障害児に接するときの基本的事項について簡便にまとめてありますので、保護者やボランティアの方々がご覧になっても役立つ内容になっています。

DVDは、はじめから終わりまで通して見ていただいても構いませんし、必要なチャプターだけを取り出して見ていただくこともできます。

教員としてはじめて聴覚障害児を前にしたときに、戸惑いを少なく、少しでも見通しを持って臨んでいただけるよう、積極的にご活用いただければと願っています。

## 1. 耳の仕組みと3つの難聴

### 1-1. 音とは



耳の仕組みを学ぶ前に、音とはどのようなものなのか確認しておきましょう。「音波」というくらいですから波の性質を持ったものですが、音は目に見えませんがピンときませんね。

もし空気の分子が目に見えたとしても、空気の分子の密度が高くなる場所と低くなる場所を繰り返す縦波が見えるはずですが、縦波ですから鼓膜に届いたときには、鼓膜を押し出す力と引く力が交互にかかって鼓膜を振動させることができるわけです。

#### 音には2つの顔がある

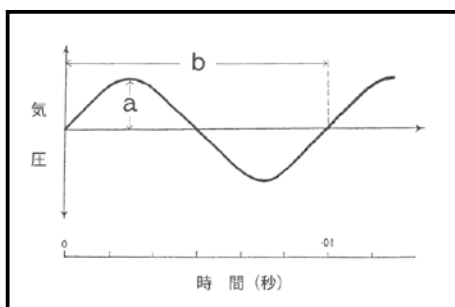
「物理的現象」としての音  
それから引き起こされる「感覚」としての音

JIS (Z-8106) の定義

音とは、①弾性波で、正常な聴力を持つ人に聴覚的感覚を引き起こす周波数範囲のもの、②上の弾性波によって引き起こされる聴覚的感覚

このような波動現象やその現象から引き起こされる感覚のことを音といいます。日本工業規格 (JIS) でも「音とは①弾性波で、正常な聴力を持つ人に聴覚的感覚を引き起こす周波数範囲のもの、②上の弾性波によって引き起こされる聴覚的感覚」と定義しています。

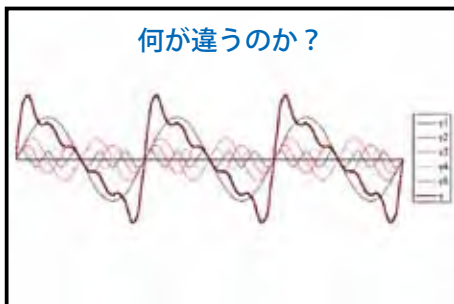
ですから「音」ということばを用いるときには、物理的な現象 (例えば補聴器の出力音) の話しをしているのか、それともその現象から引き起こされる感覚 (子どもの聴力) の話しをしているのかを、整理して使うことができると良いです (どちらも dB という単位を用いるので混乱しやすいのです)。



a : 振幅 b : 波長  
振幅が大きくなると音は大きくなる  
波長が長くなると音は高くなる

物理的な現象としての音は縦軸に気圧、横軸に時間を取るとききれいな波 (サインカーブ) で表すことができます。音には大きな音や小さな音のように「大きさ」という要素があります。音の大きさのことを音圧と言いますが、音圧は振幅 (図中 a) で決まり、dB (デシベル) という単位で表します。振幅が大きいと言うことはそれだけ気圧の変化が激しいと言うことです。感覚的には音は大きくなります (物理的には強くなります)。逆に振幅が小さいと音は小さくなります (弱くなります)。

また、音にはプーというお腹に響くような低い音もあれば、キンキンした高い音もあるというように「高さ」の要素もあります。音の「高さ」は図中 b の波長で決まり、単位は Hz (ヘルツ) を用います。Hz は 1 秒間に音の周期がいくつあったかで表します。すなわち波長が長いと 1 秒間に含まれる周期は少なくなり、逆に波長が短いと沢山の周期があるということになります。扇風機のモーター音をイメージしてみましょう。回転数の少ないときにはモーターは比較的低い音をしているのに対して回転数を上げるとモーターの音も高くなります。回転数を上げると言うことは単位時間 (例えば 1 秒間) に空気を切る回数が増えるということですからそれだけ波長は短いということになります。すなわち、波長が短いほど音が高く、長いほど音は低いということになるのです。Hz で表される数字のことを周波数といい、数字が大きいほど高い音を意味します。

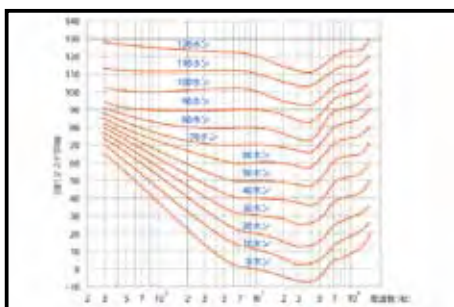


一般の音（声や楽器音）：  
複数の純音が組み合わさったもの  
波長が異なる → 音色が異なる

音には「大きさ（強さ）」「高さ」に加えて、もう一つ「音色（音質）」という要素もあります。私たちの声や楽器音は複数の純音（一つの波長からできる音）が組み合わさってできています。複数の純音が足し合わされると、サインカーブでなく組み合わせ次第で様々な波形ができます。この波形による違いを音色として私たちは感じているのです。音色は組み合わせによって変わるので、音圧や周波数のように数字で表すことができません。

聴覚障害のある人にとって、音の聞き取りやすさを整理してみると、音の強弱の変化というのは比較的捉えられやすいです。したがって、リズムは分かりやすいわけです。それに比べると音の高さはつかみにくくなります。ですからリズムをとらえることはできるけれどメロディは分からないということが起こってきます。また最も難しいのが音色（音質）の聞き分けといわれています。たとえば、音色の代表的なものに人の声質がありますが、声だけでだれか話しているのかを判断したり、また音だけで何の楽器の音かを判断したりするのは、聴者が想像するよりも難しいことなのです。

大きさ、高低、音色の順に困難度が増すことも覚えておかれるといいと思います。



フレッチャー & マンソンの等ラウンドネス曲線

ところで、音響設備の良い映画館で戦闘シーンなどを見ると地響きの音などがお腹に響いたという経験があるのではないのでしょうか。お腹に響くような気圧の変化があるわけですから振幅は相当大きいはずですが、しかし地響きは耳をふさぎたくなるような大きさに感じるかと言えばそれほどでもないでしょう。これは私たちの耳の感度が周波数によって異なっているから生じるものです。すなわち、極端に周波数が低い音や高い音は、たとえ物理的には強くても大きくは聞こえないのです。

その関係を示したものを「等ラウンドネス曲線（等感曲線）」といいます。

## 2つの尺度 (dB)

**dB SPL**：音圧レベル  
Sound Pressure Level  
基準音圧不変

**dB HL**：聴力レベル  
Hearing Level  
周波数ごとに基準音圧が変わる  
オーディオメータを用いた時のみ使用

音の大きさを表す単位はdBであると説明しましたが、例えば補聴器から出ている音の大きさなど、物理的に機械の機能を測定するときには音圧レベル (Sound Pressure Level) という音の大きさを測る物さし (尺度) を使います。そして表記はdBの後ろに Sound Pressure Level の頭文字をとって dB SPL とします。

それに対して人の聴力を測るときには物理的な尺度をそのまま使うのではなく、低い音や高い音でも正常聴力の人の結果がちょうど0になるように補正した方が使いやすい尺度になります。この尺度を音圧レベルに対して聴力レベル (Hearing Level) といい dB HL と表します。聴力レベルは、オーディオメータという聴力検査のための機械をつかってレシーバーを通して聴力検査をしたときにだけ使うことができます。



## 1-2. 耳の構造について



私たちが「聞こえた」と感じるためには、外界から耳に入った音波が脳皮質の聴覚野まで送られ、そこで知覚される必要があります。音は、空気などの分子の波動現象（振動）でした。ところが脳には振動のままでは情報は伝わりません。振動を神経を通る電氣的信号に変換する必要があります。したがって、音波が耳介から聴覚中枢に届くまでの仕組みは、音の機械的振動を伝えるための仕組み（伝音系）と、その振動を神経のパルスに変換し中枢に伝える仕組み（感音系）に大きくわけることができます。

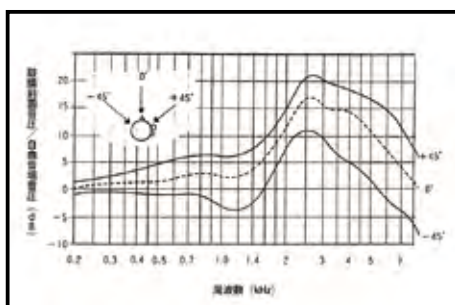
伝音系は、外耳と中耳からなります。外耳は、一般に耳と呼ばれている耳介と耳の穴である外耳道からなり、中耳は鼓膜とその後ろについている耳小骨、および中耳腔からできています。

## 外耳道の仕組みと機能

- ① 聴覚器官の保護  
→頭蓋骨が厚い  
S字カーブ  
軟骨部外耳道の汗腺、うぶ毛
- ② 外耳道共鳴  
→無声子音の弁別素性を増幅

外耳道はS字状に曲がった管で、突き当たりに鼓膜があります。外耳道の入口から約1/3は軟骨におおわれて産毛や汗腺などがあります。そのため、水をはじくなど外部からの異物が入りにくい仕組みになっているのです。また外耳道の奥の2/3は硬い骨でおおわれた部分になります。この部分は頭蓋骨の中でも最も厚みがあり耳の奥の器官を保護する役割をしています。

ところで、トンネルや洞窟の中で普段より声を大きく感じる場合があります。これはトンネルなどの空洞の中で共鳴が起きるためです。共鳴とは特定の周波数の音響成分が空洞（共鳴器）の形状や容積などによって増幅する現象です。外耳道も空洞であり一種の共鳴器の機能を持っています。



外耳道により生じる共鳴は外耳道共鳴と呼ばれます。外耳道の入口に比べ奥の方が増幅され特に2000～4000Hzの間で大きく増幅されます。

各音節を特徴づける成分の周波数と音圧を測定してみると、母音は1000Hz以下の低帯域で比較的大きな音圧を持っているのに対し、無声子音（[s] [t] など）を中心とした音は2000～4000Hzに集中しかつその音圧は小さいことがわかります。すなわち、外耳道共鳴は無声子音などの弱い成分の音声を鼓膜に増幅して届かせる機能を担っているのです。

外耳道には中耳や内耳を保護する他に、話ことばの弁別を助ける機能もあるのです。外耳道は小さな穴にすぎませんが、この大きさだからこそ、ことばが聞き取りやすくなることを考えるととても不思議な気がします。

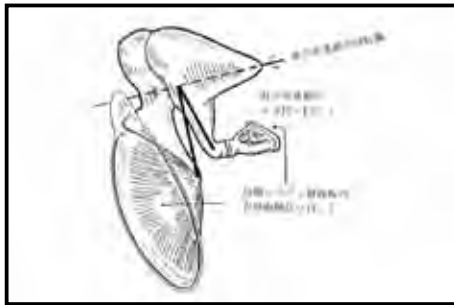
## 中耳の機能

空気の振動は液体の振動に伝わりにくい。水中の生き物が陸上生活に適応する過程ででてきたのが中耳

→内耳に効率よく音波を伝える

次に中耳について見てみましょう。大勢の人でにぎわうプールで水面下に頭を沈めたときのことを想像してみてください。水面から頭を出していたときに聞こえていたプールサイドの喧噪はどのように聞こえるでしょうか？うるさいほどの喧噪も水面下ではさほどの大きさには感じないと思います。音とは、密度の小さい媒質（例えば空気）から密度の大きい媒質（例えば水）に伝わる際には反射が起き、波の振動エネルギーが小さくなってしまいう性質を持っています。例えば空気中を伝わる音波は水中に伝わる際に99.9%は反射されてしまうのです。

ところで、ヒトをはじめ脊椎動物は、系統発生をさかのぼるとその全てが水中の生き物でした。その痕跡が、この後出てくる内耳にあります。内耳はリンパ液に満たされて液体の振動を感じるようになっていました。しかしながら空気の振動である音は液体には伝わりに性質を持っています。すなわち、内耳は空気中の音波がそのままでは伝わりにくい構造をしているのです。したがって、空気中の音の振動を効率よく蝸牛内の液体の振動に変換する仕組みが必要になります。もともと水中の生き物だった私たちの祖先が陸上生活



に適応する過程でできたのが中耳と考えられています。

音を空気から内耳液に効率よく伝えるための仕組みが中耳には2つあります。一つには鼓膜面と耳小骨のアブミ骨底の面積比です。鼓膜の振動する面積に対し、内耳に音を伝えるアブミ骨底の面積は約14:1になっています。これは釘を打つと同じで広い面でうけた圧力を小さな面に伝えるので、アブミ骨底では鼓膜の約14倍の圧力が得られることになります。

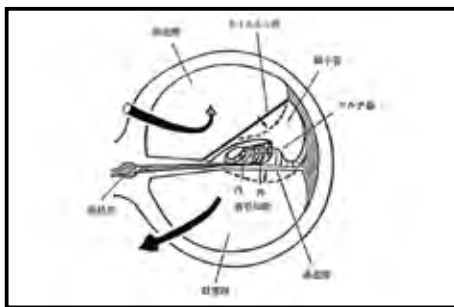
二つ目は、耳小骨のテコ比です。鼓膜についているツチ骨柄の先端から耳小骨連鎖の回転軸までの長さキヌタ骨の豆状突起から回転軸までの長さの比が約1.3:1となっています（すなわち、1.3倍圧力は強くなります）。先述の面積比と合わせると鼓膜面上の圧力はアブミ骨底では約18倍（ $\approx 14 \times 1.3$ ）になります。このように耳小骨は内耳に効果的に音を伝えるのに役立っているのです。

また、中耳には強大音から内耳を保護するという役目もあります。耳もとの風船が割れるなど大きな音を聞くと、しばらく音が聞こえにくくなりますが、これは中耳の機能によるものです。



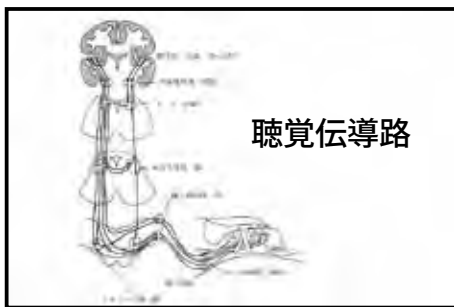
音の刺激は、神経を伝わるパルス（電気）として脳に伝えられます。内耳から中枢にかけては音を物理的振動ではなく神経のパルスに変換し伝える部分で「感音系」と言います。感音系はカタツムリのような形をした内耳と聴神経や中枢からできています。

内耳は蝸牛（内耳をカタツムリに見立てた時にカタツムリの殻に見える部分）と前庭（殻以外の部分）に分かれます。前庭は平衡機能（バランス）に関係しています。メニエル氏病のような内耳疾患になると難聴の他にめまいがするのはそのためです。蝸牛は、聴覚機能を司っています。



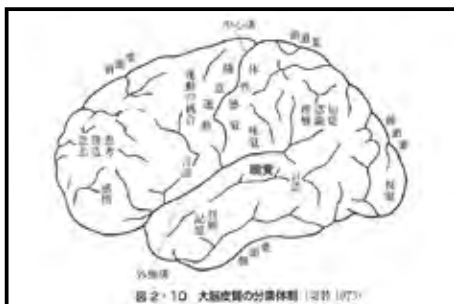
蝸牛は前庭階と鼓室階およびそれら両階に挟まれた蝸牛管の三層構造をしています。蝸牛管と鼓室階を仕切っているのが基底版で、その上に有毛細胞が並んでいます。有毛細胞は中耳から送られた振動によって神経興奮を引き起こす（神経を伝わるパルスを起こさせる）仕組みをもっています。

ところで高い音は短い波長、低い音ほど波長が長くなる性質がありました。蝸牛の中の液体の振動も同様に周波数によって基底版が大きく振動する場所が異なります。高い周波数では入口の近くで起こり、低い周波数になるにつれ（波長に応じて）奥で大きな振動が起きます。有毛細胞は波の振幅に応じて神経興奮をおこすため、大まかな周波数分析は蝸牛ですで行われることになるのです。



内耳のことを迷路ともいいます。内耳より中枢側を区別して呼ぶのに後迷路ということばが用いられることもあります。聴覚は他の感覚と比べても大脳に届く前に多様な処理が成されるのが特徴で、さまざまな中枢に神経の連絡があります。例えば、突然の音によって目が覚めるのは聴覚情報が後迷路で覚醒中枢に連絡があるためです。また、左右の耳から入った音を分析して音源の方向を判断したり、必要な音だけを選択して大脳に伝えたりすることも後迷路の働きです。

大脳の聴覚中枢は側頭葉にあって、そこでは分析された各刺激を統合し、言語音などの複雑な構造をした複合音のパターンを認知するための基礎的処理を行っていると考えられています。ですから、聴覚中枢だけが損傷を受けると音は聞こえるけれども何の音なのかの判断ができなくなる「聴覚失認」という現象があらわれます。





## 1-3. 伝音難聴、感音難聴、混合難聴



外耳から聴覚中枢にいたるまでの聴覚経路の中でどの部位が損傷をうけても聴覚障害は生じます。ただし、いずれの部位が損傷を受けたかによって聞こえにくさが異なり、必要とされる教育上・医療上の対応も異なります。

伝音系に障害を受けたものを「伝音難聴」といいます。伝音難聴では、小さい音は聞こえなくなりますが、音を感じる神経は障害されていないので、補聴器を装用すると比較的よく聞きとれます。

原因としては、中耳炎、外耳道閉鎖などで医療的治療によって回復の可能のある場合が少なくありません。

## 感音難聴の聞こえの特徴

神経が障害されている

1. 小さい音が聞こえない（閾値の上昇）
2. 大きな音に対する抵抗力が低下する（補充現象 or リクルートメント現象）
3. はっきり聞き取れない（聴取弁別能の低下）

※聴覚障害児教育の対象となっている子ども

## 内耳性難聴

- 先天性の一部
- ウィルス性
- 薬物性
- 加齢（老人性）
- 騒音性

一方、感音系に障害を受けたものを「感音難聴」といいます。感音難聴は神経が障害されているので、現在の医学では突発性難聴などの一部の例を除くと聴力そのものの回復は望めません。また、単に小さな音が聞こえなくなるだけでなく、大きな音に対する抵抗力が低下したり、聞きやすい大きさで音声を聞いても明瞭に聞き分けられないなどの特徴があります。ですから、補聴器をしても聞き取れなかったり聞き間違えたりということが起こります。

感音難聴の原因になるのは、蝸牛等の形成不全など先天性の内耳奇形によるものや、結核の治療薬であるストレプトマイシンやカナマイシンの副作用として生じる薬物性のもの、騒音によるもの、加齢によるものなどさまざまあります。また風疹やおたふく風邪などウィルス感染によって引き起こされるがあり、特に母胎のサイトメガロウィルス感染が注目を集めています。近年は遺伝子診断の技術も進み難聴の予後や他の障害を合併するリスクについても予測がつくようになってきています。準備すべき教育支援を検討する際に、感音難聴の原因を重要な情報にする時代になりつつありますので、その面にもアンテナを張っておく必要があります。

ろう学校や難聴学級等で聴覚障害児教育を受けている多くの子どもたちに感音難聴があります。補聴器で一見よく聞き取れている様にみえる場合でも、聞き取れない部分を状況判断や予想を働かせながら無理をして聞いていることが少なくないことを教員は十分に理解しておく必要があります。

3つ目の難聴として「混合難聴」があります。混合難聴は伝音系、感音系両方に損傷をもつ難聴で、例えば中耳炎から内耳炎を併発したような場合がそれにあたります。

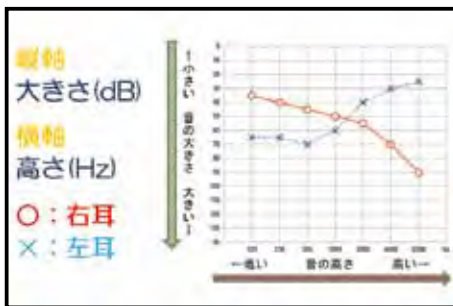
## 2. オーディオグラムを読めるようになろう

### 2-1. オーディオグラムの表記法



聴覚障害の評価法のなかで最も基本的なものに「標準純音聴力検査」があります。難聴の程度を調べる検査で、その結果を表わすグラフがオーディオグラムです。オーディオグラムを読み取ることは聴覚障害児の聞こえにくさを理解する基的で重要なことです。

標準純音聴力検査は、オーディオメータという専用の機械を使って検査をします。精密な測定機器であるので正規の状態で使用される必要があります。また、騒音のある場所ではその音が検査を妨害するので正確な聴力検査を行うことができなくなります。そのため、検査は防音室でおこなう必要があります。ろう学校や難聴学級には聴力検査室（簡易な防音室で室外の騒音を防ぎ、室内は音の反響を抑える工夫がなされています）がありますから、同僚や先輩に教えてもらいながら、是非一度自分でもオーディオメータに触ってみるといいと思います。

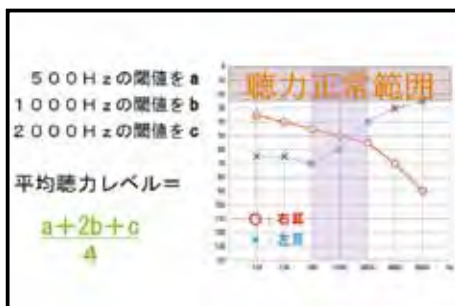


オーディオグラムは縦軸に音の大きさを取っています。単位はdB（デシベル）で、70,80,90,100と下に行けばいくほど大きな音を示しています。また、横軸は音の高さで、単位はHz（ヘルツ）で表します。中央が1000 Hzで左に行けばいくほどお腹に響くような低い音、右に行けばいくほどキンキンした高い音を表しています。

125Hzから8000Hzまでのいろいろな高さの音がで聞くことのできる一番小さな音の大きさ（閾値）をプロットしてあります。ですから、閾値が下に行けばいくほど、大きな音でないと聞こえなかったということですから、それだけ耳が遠いということを意味します。標準聴力検査で得られた閾値のことを聴力レベルといいます。

○を実線で結んだものが右耳、×を破線で結んだものが左耳の聴力です。もし色で分ける場合は、右耳は赤色で、左耳は青色で書くということになっています。また、最重度の聴覚障害児の場合はオーディオメータで提示できる一番大きな音でも聞こえないという場合があります。このような場合をスケールアウトといって、最大音の圧のところにプロットした○や×の下に下向きの↓をつけて表示します。

## 2-2. 平均聴力レベル



オーディオグラムは、周波数ごとの聴力レベルが記されているので、情報量が多いですから他機関との連携などで、子どもの困難を共有する場合は、オーディオグラムそのものでやり取りをすることが望ましいとされています。ただ、通常個人の聴力を示す場合には、左右それぞれの聴力レベルを一つの数字で代表させて表すことが多いです。その代表のさせ方の一つが「平均聴力レベル」というものです。

平均聴力レベルの算出法にはさまざまありますが、ここでは学校教育法や身体障害者福祉法の中で用いられ、日本国内では最も一般的な方法である4分法について説明します。

4分法の平均聴力レベルは500Hzの閾値を a、1000Hzの閾値を b、2000Hzの閾値を c としたときに、 $a + 2b + c$  を 4 で割ることで算出されます。なぜ 1000Hz を 2 倍するかというと、人のことばを聞きとるときに最も大切な音の高さが 1000Hz であるとの考えに基づいています。

なお、すべての周波数で聴力レベルが 25dB 未満の場合を「聴力が正常」といいます。逆にいずれかの周波数で 25 dB 以上の値になったときには聴力障害があるということになります。

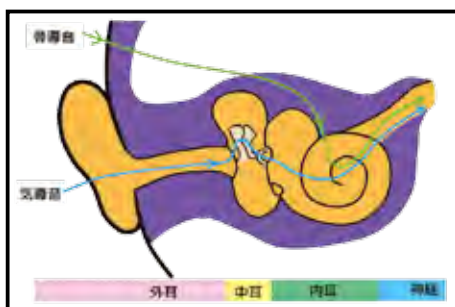
学校の中には極軽度の難聴の子どもや、一側耳だけに難聴がある子どももいますが、そのほとんどは補聴器を装用していませんし、難聴学級等の活用もしていません。それらの子どもたちも大勢の中での会話が聞こえにくかったりするので、注意することが必要です。

### 平均聴力レベルの算出法

500Hzの閾値を a  
1000Hzの閾値を b  
2000Hzの閾値を c

$$\frac{a + 2b + c}{4}$$

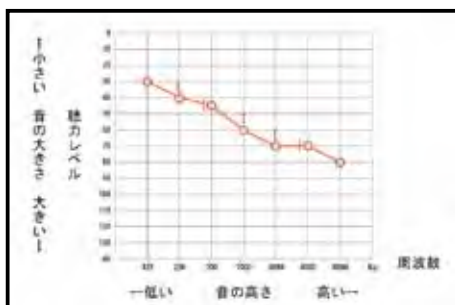
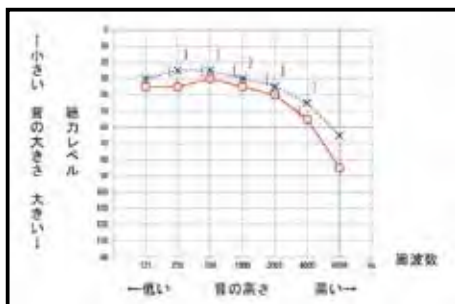
### 2-3. 気導と骨導



皆さんは自分の声を、録音して聞いたことがありますか？ 普段の自分の声と違って違和感を覚えたことがあるかと思います。われわれが自分の声を聞くルートは、空気の振動として耳から聞く気導のルートの他に、骨の振動が直接内耳液の振動になって聞こえる骨導ルートの二つがあります。ところが、録音をすると気導ルートだけの音声になるので発話者自身には違和感があるのです。漬け物を噛むときに、食べている本人には大きな音に聞こえるのも骨導によるものです。

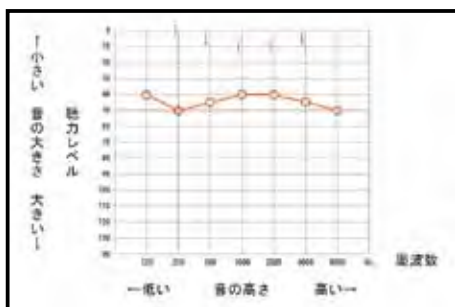
オーディオグラムの中には、気導聴力レベルである○×以外に、[や]の印がプロットされている場合があります。標準聴力検査には、耳介にあてたレシーバーから音を聞く、一般的な気導による検査のほか、直接頭蓋骨に振動を与えて蝸牛に音を伝える骨導による検査の二通りがあります（[ : 右耳、 ] : 左耳）。

気導による検査に加えて、骨導による検査を行うことで、伝音難聴や感音難聴などの鑑別できます。



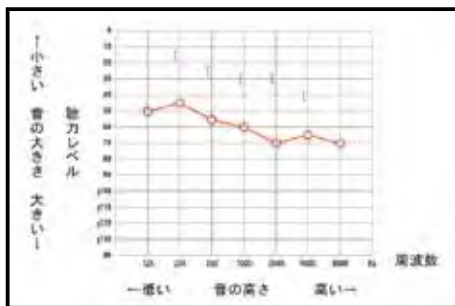
#### 感音難聴のオーディオグラム例

感音難聴の場合は伝音系の障害がなく内耳以降の感音系だけの障害であるので気導の検査結果と骨導の検査結果に差がありません。



#### 伝音難聴のオーディオグラム例

感音難聴のオーディオに対し、伝音難聴の場合は、骨導閾値は正常の範囲にあります。気導閾値に上昇（大きな音でないと聞こえない）がみられます。



#### 混合難聴のオーディオグラム例

混合難聴は伝音系、感音系ともに障害を受けているので、気導の結果と骨導の結果に差がありかつ骨導閾値は難聴のあることを示します。



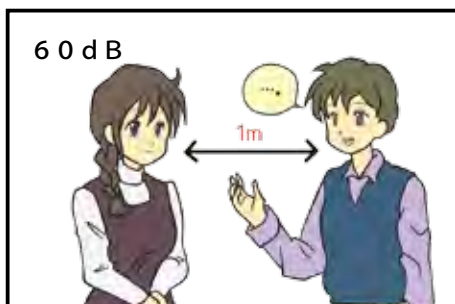
## 2-4. 代表的な音の大きさについて



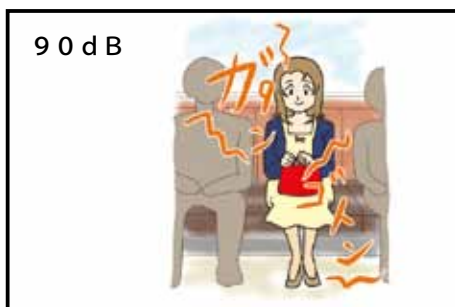
20歳前後の聴者の閾値



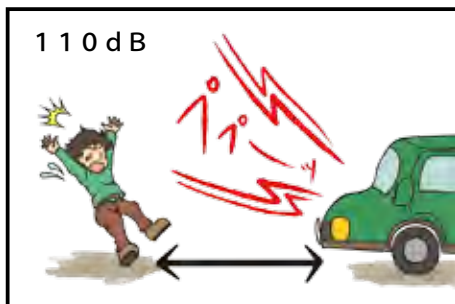
新聞をめくる音



1m離れて静かなところで話す声



電車（毎日の生活で聞く最大音）



2m先のクラクション

突然ですが「今度赴任する校長先生は身長が2mなんですって」と言われるとほとんどの方が「ずいぶん背の高い方だなあ」と思われると思います。これはメートルと言う単位について私たちが経験上の知識をもっているから、判断できることです。ところがデシベル（dB）という単位については、どうでしょうか。50dBよりも80dBの方が難聴の程度が重いと言うことはわかりましたが、ほとんどの方は経験的知識を持っていませんから50dBや80dBの難聴とはどのくらい聞こえないのかということについてはピンと来ないと思います。そこで代表的な音の大きさについて整理しておきたいと思います。

目安となる音の大きさの中で特に覚えておいてほしいのは60dBと90dBです。まず、0dBですが、20歳前後の聴力障害のない方の閾値になります。聴覚は25歳を過ぎると老化による聴力低下が始まるといわれています。その影響のない20歳前後のとなっています。60dBは、1m離れて静かなところで話す声の大きさです。すなわち通常の会話の大きさということになります。聴力が60dBを越えると1m後ろでお父さんとお母さんが話をしていても補聴器をしていないと子どもはそのことに気づかないということになります。逆に50dBの難聴の子どもは話の内容は聞き取れなかったとしても、家族が話しているということには気づくことができます。気づけば話の内容を確認することもできますから、60dBが聞こえるかどうかは一つのポイントになります。

また、次に覚えておいてほしいのが90dBです。90dBは電車の音などが該当しますが、通常的生活をおくるなかで耳にする一番大きな音といわれています。90dBを越えるということは、補聴器などを装用しないと一日音のない世界にいるということになります。逆にそれより軽い子どもは仮に補聴器を装用していなかったとしても、世の中には音というものがあることを活用して皆は生活しているということは分かっているということになります。

標準聴力検査と補聴器を介しての聴力検査は厳密には異なる点があるので、今回は詳しくは触れませんが、補聴器や人工内耳を装用した状態の閾値でもほぼ同様のことが言えます。みなさんの担当されるお子さんの聴力や補聴器などを使って聞こえる閾値を意識してみると、お子さんの聞こえの状態がつかみやすくなると思います。



## 2-5. 障害者手帳の等級基準



## 障害者手帳の等級基準

- 6級：両耳70dB以上  
片耳90dB以上で他耳が50dB以上
- 4級：両耳80dB以上  
語音弁別能50%以下
- 3級：両耳90dB以上
- 2級：両耳100dB以上

聾唖の場合：1級

## 3つの障害者手帳

## 身体障害者手帳

対象：視覚障害、聴覚障害、音声・言語機能障害、そしゃく機能障害、肢体不自由、内部障害である心臓機能障害、呼吸器機能障害、じん臓機能障害、ぼうこう又は直腸機能障害、小腸機能障害、免疫機能障害

## 3つの障害者手帳

## 療育手帳

愛の手帳、愛護手帳、みどりの手帳など  
対象：知的障害

## 精神障害者保健福祉手帳

対象：精神障害  
(発達障害者に対しても交付される場合がある)

平均聴力レベル（4分法）は、学校の就学指導等に用いられるだけでなく、身体障害者福祉法の中でも用いられます。同福祉法では一定以上の障害の重さを認定して、その範囲の者に公的な支援を行うことになっています。その公的支援の権利を証明するものが、聴覚障害の場合は、「身体障害者手帳」となります。

聴覚障害の場合、障害者手帳の等級基準は、一番軽い等級が6級で、両方の耳の平均聴力レベルが70dB以上の場合か、または片側耳が90dB以上の時にもう一方の耳の聴力が50dBを越えた場合となっています。次に重い等級が4級で両耳の平均聴力レベルが80dB以上の場合か、または単音節を最も聞きやすい大きさで聞いたとしても正当率が50%以下の場合が該当します（聴覚障害の場合5級はありません）。その次が両耳の平均聴力レベルが90dB以上の3級、そして一番重いのが、両耳の平均聴力レベルが100dB以上の2級となります。

聴覚障害では2級が最も重い等級で1級がありません。ただし、言語獲得前から重篤な聴覚障害がある場合には自分の声を明瞭に聞くことにも制限を受けるために、発話が不明瞭になります。不明瞭さが著しい場合は言語障害の3級（言語機能の喪失）に該当します。言語障害の3級と聴覚障害の2級が合わさると1級になります。すなわち聾唖の状態の時には1級となります。

障害者手帳に該当すると、補聴器の交付や就労における法定雇用率へのカウントなどメリットがあります。障害者手帳は義務ではなく権利であることを、教員が認識しておくことが大切です。ちなみに障害者手帳には聴覚障害や言語障害、視覚障害、肢体不自由、内部障害（心臓や肺機能など）などの障害を対象とする「身体障害者手帳」と知的障害者のための「療育手帳」（東京都では「愛の手帳」と呼ぶなど、自治体によって様々な名称があります）、そして精神障害者などを対象とする「精神障害者保健福祉手帳」の3つがあります（最近はいわゆる発達障害を精神障害者保健福祉手帳で対応する自治体が増えています）。それぞれ利用できる制度が違いますから、複数の障害を重複する場合には複数の手帳を取得する必要があります。

### 3. さまざまなコミュニケーション

#### 3-1. コミュニケーションとは

##### コミュニケーションとは

社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達。  
言語・文字・その他視覚・聴覚に訴える各種のものを媒介とする

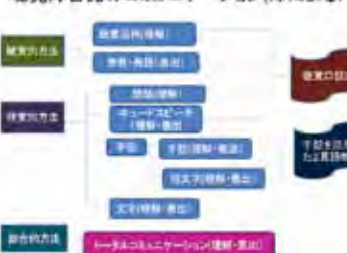
広辞苑

##### コミュニケーションとは

- ◎身振り
- ◎表情
- ◎頷き・首ふり
- ◎読話
- ◎筆談
- ◎手話

そして、話して聞く

聴覚障害児のコミュニケーション(滞による)



コミュニケーションとは、広辞苑には「社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達。言語・文字・その他視覚・聴覚に訴える各種のものを媒介とする」と書かれています。すなわちコミュニケーションは、感情や思考を伝え合うのに、言語はもちろんですが非言語的なものも使いながら行われるものなのです。

主たるコミュニケーション方法をまとめてみますと、身振り、表情、頷き・首ふり、読話、筆談、手話これらすべてが聴覚障害児とコミュニケーションをするときの大切な手段となります。また、聴覚障害者全体で言うと、聞こえにくいながらも補聴器等を活用して自分の耳で聞いてそして話すという手段を用いている人が一番多くなります。

初めて聴覚障害児と接する方が抱える心配事の一つに「自分は手話が分からない」と言うことがあると思います。手話は聴覚障害者にとって大切なものですから是非機会をみて習得してほしいと思います。ただ、教員としてそれよりも大切なのは「教員としての専門性」です。子どもの特性をつかんで、何をどう教えるのか、またそのためには教材をどう工夫するのかと言うことが一番求められるのです。

あらゆるコミュニケーション手段に対して柔軟な頭と心で望んでほしいと思います。

#### 3-2. 言語によるコミュニケーション

心情の理解、例えばうれしいという気持ちを伝えるときにはいっぱい笑顔や身振りの方がことばで表すよりも効果的なコミュニケーション手段となることが少なくありません。ところが何らかの知識や思考を伝達したいという場合には、身振りや表情だけでは限界が出てきます。やはり言語というものが必要となります。

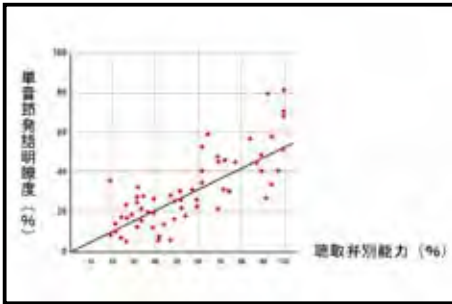
言語という場合に、一般的には音声言語（話しことば）がありますが、聴覚障害児・者の場合には、それとは別に手話も大切な言語として位置付けておく必要があります。

## 3-2-1. 音声言語によるコミュニケーション



突然ですが、みなさんは英語で右という意味の Right と光の Light とを聞き分けるのに苦勞した経験はありませんか？イギリスの幼児が聞き分けられるのに、日本人には、なぜこのようなことが起こるのでしょうか？

私たちは日本語の中で育っていますから頭の中には日本語の音韻体系が出来上がっています。そこに英語のLやRの音が入ってきてもう行音にしか聞こえないということなのです。すなわち、音韻体系は母語に触れることによって後天的に獲得されるものなのです。このように考えると、聴覚障害児が早期から補聴器や人工内耳の装用を開始することの意味も分かります。



また、発音に関しても聴覚障害児の場合は聞こえに制限があるため自分の声を自からの耳で聞くということが制限されます。そのために発音が不明瞭になって意味が伝わらないということが生じます。たぶん先生方が、最初に戸惑われるのは自分が伝えたいことが子どもに伝わらないことではなく、むしろ子どもの言っていることが分からないということではないでしょうか。発話の明瞭性は聴力レベルよりも、それぞれの子どもの音声を聞き分ける力（語音聴取弁別能力）と関係が強いです。明瞭な発話のためには語音を聞き分ける力を育てることが大切になります。

**平均聴力と音声言語の目安**

- 平均聴力レベル70dB未満  
騒音下でも一対一のやりとりがある程度は可能
- 平均聴力レベル70dB～90dB未満  
静かなところでなら一対一のやりとりはある程度可能
- 平均聴力レベル90～110dB未満  
個人差が大きい
- 平均聴力レベル110dB以上  
音声言語だけでは会話が困難

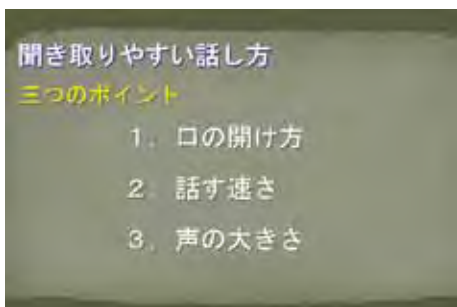
次に、早期から補聴器を装用してきた子どもたちの、平均聴力レベルと音声コミュニケーションの大きな目安を示します。

平均聴力レベル70dB未満の者は騒音があるところでも1対1での会話はある程度は可能なことが多いです。ところが、平均聴力レベル70dB～90dB未満になると、静かなところでなら一対一のやりとりがある程度可能でも、騒音下ではコミュニケーションが困難になる者が多くなります。さらに難聴の程度の重い平均聴力レベル90～110dB未満では、静かなところでなら1対1で会話がある程度可能な者から静かなところでも会話が困難な者まで個人差が大きくなります。ろう学校に一番多いのはこのあたりの聴力の子どもたちになります。聴力障害のさらに重い平均聴力レベル110dB以上になりますと、いかなる状況でも音声言語だけでは会話が困難になります。

これらはあくまでも目安ですので、比較的軽い難聴でも聞き取りに苦勞する子どももいますし、聴力レベルは厳しくても聴覚を上手に活用している子どももいます。音の環境に応じて一人ひとりの聞き取りの様子をよく観察することが大切です。

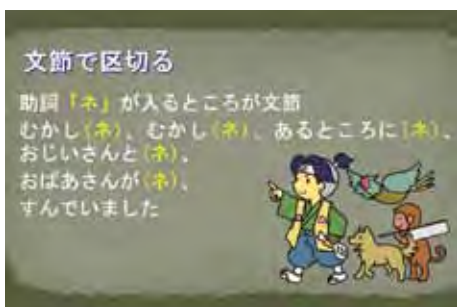
## 3-2-2. 聞き取りやすい話し方

難聴学級等も含めると、聴覚障害の子どもたちは聞こえにくいながらも補聴器や人工内耳を活用しながら自分の耳で聞いて自分の口で話すというコミュニケーション手段を使っている子が、最も多くなります。ですから、彼らに接するときに、いかに聞き取りやすい話し方ができるかは教員に求められる能力の一つとなります。聞き取りやすい話し方のポイントは3つあります（DVDにも動画がありますから是非参考にしてください）



1番目は、口の開け方大きさです。小さい口でモゴモゴ話されたのでは聞き取れません。また逆に極端に大きすぎるのも不自然で読話もしにくいです。適切な口の大きさは母音アの大きさをどのくらいにするかで概ね決まってきます。

親指の第一関節を軽く上の歯と下の歯で噛んでみましょう。その時の口の大きさが母音アの大きさになると覚えておくと良いでしょう。アの大きさが決まれば自然と他の母音である「イ」「ウ」「エ」「オ」の大きさも決まります。



2つ目のポイントは、話す早さです。早口は、聴覚障害者にはとても分かりにくいものです。ゆっくり話せというと「わー」「たー」「しー」「のー」のように一音ずつ引き延ばす人がいますが、これは不自然です。それで、文節で区切って話をすると、早さが遅くなり分かりやすくなります。文節とは助詞の「ネ」が入るところです。文節は意味の単位になりますから、どこで区切りを入れるかも大切です。



3つ目のポイントは声の大きさです。小さい声よりは大きな声の方がいいですが、大きすぎる声は、耳に響いてかえって聞き取れなくなることも少なくありません。むしろ近づいて普通の大きさに話してもらうのが分かりやすいです。



### 音声言語を補う手段

#### 読話

口の動きでことばの意味を読み取る

#### 文字

筆談／要約筆記／空書  
キュードスピーチ／キューサイン

手話・指文字

### 3-2-3. 音声言語を補う手段

いくら分かりやすい話し方を心がけても、また補聴器等を活用したとしてもやはり聞き取れないことや聞き誤るといことが生じます。とくに学習場面では家庭生活とは異なって知らないことばが沢山出てきます。そういうものを不確実な音声だけで聞き取り理解するのは難しいです。その際には視覚的な手段を併用することで確実性が増します。



#### ア) 読話

「読話」とは口の動きでことばの意味を読み取るコミュニケーション手段ですが、音声と併用することで確実性を増すとされています。読話では、予想がつくことであれば、口の動きを見ているだけで分かるので、聴覚障害児と話す時には口が見えるように意識することはとても大切です。授業で板書をする際に黒板を見ながら話をするなどということがないように気をつけてください。

ただし、予想がつかないことや知らないことばを読話だけで伝えるのは限界があります。



#### —DVDの答え—

むかし むかし あるところに おじさんと おばあさんが  
住んでいました おじさんが山へ芝刈りに行っている間に  
役所から 年金手帳が 送られてきました



#### イ) 筆談・要約筆記

聞き取りにくさを補う手段の2つ目として「筆談」があります。書くことは話すスピードより5倍以上の時間がかかってしまいますので、冗談を言い合ったりするような情緒的な交わりの際には時間的な遅れができて筆談は限界があります。

それでも、要点やキーワードだけでも書き出すことで大まかな話の流れをつかむことが可能になりますので重要な手段となります。文字での提示は、正確性の高い手段ですので、授業の中でも話の要点やキーワードを教員が黒板や紙に書き出して示す習慣をつけるといいと思います。

話し手自身が双方向のやり取りに用いるときに「筆談」と言うのに対して、授業や講演などを第三者が文字によって情報保障する方法を「要約筆記」と言います。特に、学年が上がるにつれて専門用語等がふえると授業での情報保障は手話などよりもパソコン等を用いる場合も含めた要約筆記が有効になることが多いです。





## 筆記用具がない時でも

### 空書のポイント

- ①一文字ずつ、書く場所を変える  
同じ場所で書くと、どこで文字が終わったのかわかりにくい
- ②普段通りに書く  
鏡文字は気にしない

また、外出中で筆記用具がないときでも「空書（くうしょ）」といって曇りガラスに文字を書くように何もいないところ（空気）に文字を書くように指を動かすと言う方法があります。空書の際に気をつけることは、1文字ごとに書く場所を変えるとということ、普段通りの実順で書くということです。反対側から相手が見ているからと言って左右逆の鏡文字を書く必要はありません。

空書は複数の人に同時に情報を届けるには有効ですが、ひとりにだけ伝えたいときには不向きです。その際には、相手の手のひらに指で文字を書くのが有効です。筆記用具がないからと躊躇せず、空書などの工夫をして積極的にコミュニケーションをとってもらいたいです。



### ウ) キョードスピーチ

補聴器の技術的進歩により1960年代から重度の聴覚障害児でも個別的に聴覚を補償することが可能になってきます。そのことから、聾学校の幼稚部等では聴覚を活用し自らの音声でコミュニケーションを取る聴覚口話法が強力に進められてきました。聴覚口話法による教育は、聴覚障害児が音声コミュニケーションによって聴者の集団により円滑に参加できるようにするなどの一定の成果を上げたが、聴覚口話法だけでは十分なコミュニケーション力や言語獲得が十分にできない子どもたちが存在することも明らかになってきた。その過程で、視覚的な補助手段として導入された一つの方法がキョードスピーチです。

キョードスピーチとは、「手がかり言語」という意味で、音韻についての視覚的な手がかりを手のサインで表します。従来の口話法に手指記号であるキュードサインをつけて話すことをキョードスピーチといいます。キュードサインは、日本語の50音表のたての「行」を手の動きで表し、横の「段」を母音の口形で表し、手と口形を同時に動かすことで50音表の1音を表します。日本語の音韻構造を習得させるうえで有効な方法です。

キュードサインは、指文字よりも少ないこともあって表現方法の習得は容易ですが、読み取りは難しいと言われています。また、手話を用いているろう者とはコミュニケーションが充分にとれずろう者の集団に入ることができないことや、手の動きに合わせて一音ごとに話すために、発話のリズムやイントネーションが崩れ、話しことばが不自然になってしまうなどの理由から、現在では一部のろう学校で用いられています。



### 3つの手話

**日本手話**

単語・語順等の規則が日本語とは異なる

**日本語対応手話**

日本語を手話の単語に置き換えて表現  
音声との併用のことを

→シムコム (simultaneous communication)

**中間型手話**



## 3-3. 手話・指文字によるコミュニケーション

### 3-3-1. 3つの手話

手話は聾者の集団の中から自然発生的に生まれたもので、手・身体・表情等を使って表す日本語と異なる文法構造をもった独立した言語です。コミュニケーション手段が規則性を持った言語として確立するためには、その言語を使用する人が集まる必要があります。日本の歴史の中で聴覚障害者が集団を作ったのはまさにろう学校が設立されたときです。ろう学校のなかで手話は育まれてきたわけです。

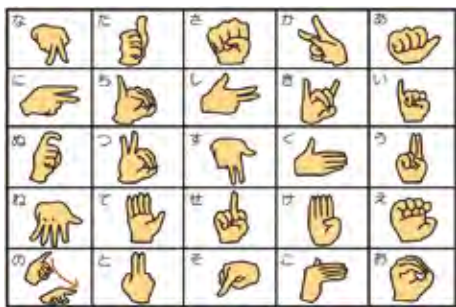
この自然発生的に生まれた手話を「日本手話」とか「伝統手話」とよびます。例えば、「どこ」「だれ」などの疑問詞は基本的に文末にきますし、「ご飯を食べる」と「パンを食べる」では「食べる」という動詞は異なる表現になります（ご飯は、箸を使って食べる様子を表しますし、パンは手でつかんでパンを食べる様子で表現します）。また「とてもうれしい」という表現は、「とても」と「うれしい」の2語で表すのではなく、「うれしい」の動きを大きくするだけで表現することができます。ですから音声で話しながら日本手話をするのは、なかなか大変です（NHKの「手話ニュース」でも手話表現と話しことばのタイミングがずれることがあるのはそのためです）。

それに対し、日本語を既に獲得した中途失聴・難聴者にとって使用しやすい（日本語を話しながら使える）手話も存在します。それを日本手話に対して「対応手話」と区別します。「シムコム (simultaneous communication)」と呼ばれることもあります。また、日本手話と対応手話の両方が混在してつかわれる中間手話と呼ばれるコミュニケーション手段もあります。ただ、中間手話は日本手話や音声日本語の獲得ができていた人がその力をベースに理解したり表現したりしているもので、独立した言語とは言えないかもしれません。ただ聴覚障害児教育においては、一人ひとりに応じた負担の少ないコミュニケーション手段を尊重するということが基本ですから、日本手話から対応手話までその全てを手話と呼んでいます。

### 3-3-2. 指文字

手話と一緒に用いられる手段に指文字があります。指文字は、日本語音節やアルファベットを指の形で表したもので、外来語や手話表現が分からない時などに用いられるコミュニケーション手段です。平がな、カタカナに続く3つ目の仮名文字を覚えるつもりで身につけるようにしてください。

現在では、聴覚口話法を軸としながらも、手話や指文字の活用を幼稚部から個に応じて積極的に導入する学校が増えてきています。また、難聴特別支援学級や通級指導教室でも手話や指文字を指導のなかで導入し、聴覚障害児同士のコミュニケーションを円滑に進める取り組みなども見られるようになってきました。



### 聴覚障害者にとって かけがえのない



### 全ての聴覚障害児にとって 必要な手話

軽中度難聴や人工内耳装着者も含めた、すべての聴覚障害児者のための手話

手話の集団に円滑に参加できる能力を身につけさせることも重要

### トータルコミュニケーション

どのようなコミュニケーション状況にも相互に確実に負担の少ない手段を選択しようとする一つの理念（ロイ・ホルコム）

その後アメリカの聴覚障害教育のみならず多くの国の聴覚障害教育に影響を与えた

### 3-3-3. 手話のもつ多様な価値

1990年代の終わりから聴覚・口話法だけでコミュニケーションを行っていたろう教育に手話が導入されることになって、子ども同士の双方向のコミュニケーションが豊かになりました。聴覚障害児にとってアクセスが容易で豊かなコミュニケーションをとれる言語環境を提供することは、言語力だけでなく年齢相応の概念形成や心情の育ちなど様々な面で教育的効果が期待できます。

手話による言語活動そのものを高めることは、言語一般がもつ構造や機能についての理解を深めることにつながります。ただし、手話（特に日本手話）は日本語とは異なる独立した言語ですから、手話を通して直接的に日本語の読み書きの力が身に着くわけではありません。手話などの視覚的手段の長所を取り入れながら日本語の力を身につけさせることについて、さまざまな実践が行われています（9. 手話と書きことばを参照）。

ところで、北欧やアメリカでは、聾者を障害者ではなく文化的・言語的マイノリティ（少数者）として捉えるように障害者観の変化が生まれてきています。これまで、手話は、コミュニケーション手段や日本語獲得の手段として議論されることが多かったのですが、子どもたちの障害認識の観点から軽中度難聴や人工内耳装着児も含め、「全ての聴覚障害児にとって必要なもの」であるとの認識に立って、手話をとらえる必要があるのではないのでしょうか。

聴覚障害児の一生涯の発達を考える時に、手話の集団に円滑に参加できる能力を身につけさせることも重要です。成人聾者の教育への参加など手話の環境を学校教育の中でどのように位置づけるかは、現在の聴覚障害児教育の課題の一つとなっています。

### 3-4. トータルコミュニケーション

1968年にアメリカのカリフォルニア州サンタアナ学区のロイ・ホルコムが提唱したトータルコミュニケーションという考え方は、手話を大切なコミュニケーション手段の一つと位置づけ、コミュニケーションの成立が教育にとって土台になることを強く主張したものです。トータルコミュニケーションは1つの具体的なコミュニケーション手段ではなく、むしろどのようなコミュニケーション状況にも相互に確実に負担の少ない手段を選択しようとする一つの理念です。この考え方はその後アメリカの聴覚障害教育のみならず、多くの国の聴覚障害教育に影響を与えました。

現在多くのろう学校では、聴覚の活用をベースにしながら、子どもの実態に応じて手話等の視覚的コミュニケーション手段の併用を積極的に行っており、トータルコミュニケーションを行っているということが出来ます。

## 4. 言語獲得について

### 自然言語の獲得

自然言語とは  
人が特別な訓練なしに自然に  
習得し使用する言語

広辞苑

### 自然言語の獲得

#### 例文 1.

校長**は**帰ったらメールのチェックをします。

#### 例文 2.

校長**が**帰ったらメールのチェックをします。

#### 質問：

メールをチェックする人が違うのはなぜ？

### 自然言語の獲得

学習では説明できない無意識的な言語ルールの獲得こそが言語獲得の本質。

本来、自然に獲得するはずのものを、意図的な「学習」のなかで教えることに困難が生じる。

### 4-1. 自然言語とは

聴覚障害は子ども達の発達にさまざまな影響をもたらしますが、そのなかで最も大きなものが「言語獲得」です。言語獲得という場合の、言語とは自然言語と呼ばれるものを指します。自然言語とは広辞苑では「人が特別な訓練なしに自然に習得し使用する言語」と説明されています。

例文を見てみましょう。例文1の「校長**は**帰ったら」の文章でメールのチェックをするのは校長自身になりますが例文2の「校長**が**帰ったら」の文章でメールをチェックするのは、校長以外の誰かということになります。このような動作の主体の判断は簡単にできるのですが、「は」と「が」が変わったらどうして、メールをチェックする人が変わったのかを説明しろと言われると答えに窮するのではないのでしょうか。

このように、私たちの言語の運用はきわめて無意識的な活動で、意識をしてことばの順序をいちいち考えて話しているわけではありません。言語を獲得する過程も、意図的な学習を通して習得しているわけではないのです。逆に言うと、言語は周囲にその言語を話す人がいて、聞こえてさえいれば、自然に獲得されるものです（ですから、イギリスで育った日本人は英語が話せるようになります）。

言語が無意識に運用されている他の例として、助数詞を見てみましょう。猫を数えるときには助数詞の「匹」を用います。漢字では匹ですが、読み方は1の時が、イッピキで、2の時がニヒキで、3の時がサンビキとなりますね。匹が濁音化したり半濁音かするのはなぜでしょうか。そのように問われるとまたまた、答えに窮してしまいます。でも、5歳の幼稚園の子どもに「猫が58いたら？」と尋ねると、ちゃんと58ピキと半濁音化して答えます。言語獲得とは、聞こえてさえいれば、言語のもつルールを無意識的に獲得して、初めての事態にもそのルールを適応していく能力のことなのです。

カニは1ばい、2はいと数えますが、その助数詞をはじめて教えてもらった小学生でも「じゃあ、カニが53の時は、何はい？」と尋ねると、「53ばい」とちゃんと濁音化して応えることが出来ます。同じ問題を日本語を勉強中の留学生にと尋ねたらなんと答えるのでしょうか？その答えは、たぶん「まだ習っていません」となるはずです。学習とは、習得したことは理解できるし使用することもできますが、習っていないことは分からないものです。それに対し言語獲得はきわめて自然で無意識的に獲得したルールを適用することですから、習ってもいないものに対しても対応が出来るのです。

言語は聞こえてさえいれば、そして周囲にそのことばを使っている集団があれば、自然に獲得されるものです。本来にも教える必要のないものです。ところが聴覚障害児は聞こえに制限があるために、それを意図的な学習場面で教えなければならぬということになります。そこに聴覚障害児教育における言語指導の困難さがあるわけです。また、特に日本語（日本手話特別して話しことばを日本語と記しました）の力は、読み書きの力も影響するものです。日本語の読み書きの力は教科学習のベースとなる力で、その後の学習活動全般に影響する大切なものなのです。聴覚障害児教育が手話を大切



にしながらも、日本語の習得にこだわるのはこのような理由からなのです。

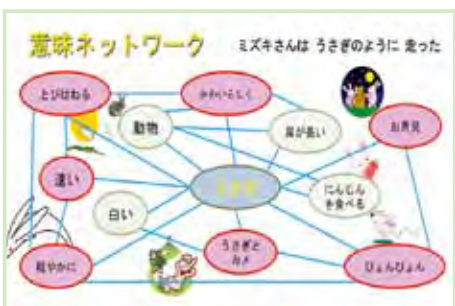
### 言語の4つのレベル

- ① 音韻のレベル
- ② 語彙のレベル
- ③ 文法のレベル
- ④ 談話のレベル

#### 4-2. 言語（言語の諸側面）のどこに誤りが生じるのか

聴覚障害児の言語の躓きは多岐にわたりますが、ここでは書きことばに表される日本語の力という観点で、4つのレベルで整理したいと思います。

まずは、単語を形成する音の単位である「音韻のレベル」。次が単語と意味の関係を扱う「語彙のレベル」。3つ目が、文を構成する単語と単語の間のルールである「文法のレベル」。そして4つ目が複数の文章を扱う「談話のレベル」です。子どもの誤りがどのレベルの躓きと捉えることができると指導のプランを考えることができます。



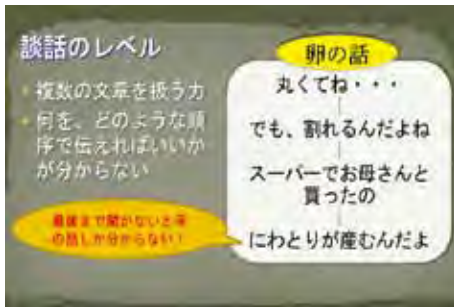
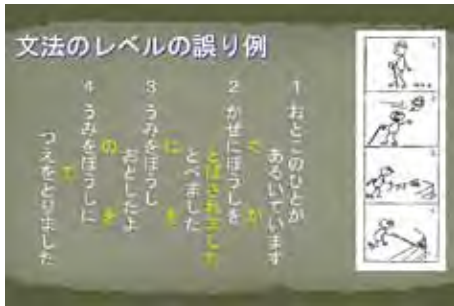
例えば、動物の「ぞうさん」を「どうさん」と書いている子どもがいます。 「ぞ」と「ど」は音響的に近い音であるために、頭の中にある言語的分節単位である音韻の混同が起きていると考えることができます。このような場合には「ぞ」と「ど」は違うということを押さえてゾウの場合は「ど」ではなく「ぞ」であると確認してあげる必要があります。また「かたつむり」のように音節数の多い単語になると「かたむつり」や「かたつり」といった音の順序を間違えたり脱落を起こしたりということも起こってきます。一つ一つの音韻は扱えても一連の順番を正しく扱えない場合も音韻のレベルでの躓きと考えることができます。音韻のレベルでの躓きがあると新しいことばをなかなか覚えられないという困難で表れてくる場合があります。

音韻の躓きへの対応で、ろう教育の中で伝統的に用いられている手法に、口声模倣（こうせいもほう）があります。口声模倣は子どもが誤ったり曖昧な発話をしたときに、教員が正しい発音でモデルを示して、そのモデルと同じように口を動かし声を模倣することを求めるものです。例えば、教員が「かたつむり」とはっきり口を見せモデルを示して子どもにも「かたつむり」と言わせる場合がそれに当たります。簡便で効果的な方法ですから覚えておくと良いと思います。

次に、語彙のレベルの躓きです。「ミズキさんはウサギのように走った」という文章があったとしましょう。この文章を理解するときどのような必要かという、ウサギということばに対して図鑑に載っているウサギをイメージしていたのでは駄目で、ウサギということばから「ぴよんぴよん」「跳ねる」「すばしっこい」「ジャンプ」などということばがウサギということばに付随して浮かんでこないという理解できないわけです。

これはいわゆる「意味ネットワーク」といわれるもので、広く目の細かいネットワークであるほど、ことばのイメージが多様になります。聴覚障害があると経験の中でことばを聞くという経験が制限されてきます。そのために一つ一つの単語を知っていたとしてもイメージが乏しく関連させて捉える事が苦手だということが起こってくるのです。授業の中で、関連語や反対ことばを積極的に取り上げたり、子ども同士でなぞなぞ遊びやクロスワードパズルを楽しむ雰囲気を作ったりすることが語彙力の向上には有効です。





次のレベルは文法のレベルでの躓きです。ある聴覚障害児が書いた文章に「かぜにぼうしをとべました（風で帽子が飛ばされました）」と言うのがあります。かぜでの「で」が「に」になったり帽子がの「が」が「を」になったりと助詞の誤りが見られますが、このような誤りは聴覚障害児ではよく起こります。また動詞の活用も間違いが起きやすいです。文法の指導は聞こえない子の多くが抱える課題です。丁寧な指導が必要です。

最後に「談話のレベル」です。文法のレベルまでクリアできている子どもでも、複数の文章をうまく扱えないということが起こります。例えば、自分の経験話す時には聴き手が知っている情報と知らない情報を判断して、必要な情報を示す必要がありますが、談話のレベルで躓く子どもは、うまく説明ができませんし文章で書くこともできません。

談話を評価する際に、「整合性」と「結束性」という概念があります。整合性は話そうとするテーマと各発言（文章）が的外れになっていないかと言うものであり、結束性は各発言（文章）のつながりが円滑になされているかを見るものです。談話の力をつけるためには、必要な情報を的確に聞き出しながら再度自分で文章を構成させるなどの練習が必要になってきます。また、新聞などから子どもに合った最近の出来事を取りあげテーマに沿って自分の考えをまとめさせたり報告させることも大切です。

この4つのレベルで、子どもの躓きを整理してみると各々の子どもの指導のポイントが見えてくると思います。

**ことばの指導のポイント**

1. コミュニケーション意欲を高める
2. 経験の中にことばを乗せる
3. 口声模倣と拡張模倣
4. 繰返し多様な場面で使わせる
5. 使ったことばの意味を確認させる

### 4-3. ことばの指導のポイント

聞こえないがために、自然に身に着くはずの言語が、さまざまなレベルの躓きとなって現れることを説明しました。言語指導は国語の授業だけで行うものではありません。学校や家庭、生活のあらゆる場面を使って行うものです。言語指導そのものは奥深い専門性が求められますのでこのDVDだけで説明は難しいですが、知っておくというポイントを5つだけ挙げておきたいと思います。

一つ目は、「コミュニケーション意欲を高める」ということです。伝えたい気持ち、知りたい気持ちがないままにことばの形だけ指導しても身にはつきません。言語の獲得を促すためにも、また意図的学習を進めるためにもコミュニケーション意欲は重要です。

二つ目は、経験の中にことばを乗せるということです。例えば泣いている顔の絵を見て「かなしい」ということばを勉強してもイメージが広がりません。大切に飼っていたペットが死んでしまったというような経験のなかで「かなしい」ということばを入れてあげる必要があります。

三つ目は、音韻のレベルでの躓きのところでもでてきた口声模倣です。また子どもが言ったことばを一層広げる「拡張模倣」（かくちょうもほう）と



いうものもあります。例えば子どもが「みかん」とだけ表した時に「みかんを食べる」というように文章にして返してあげてそれを模倣させるような方法です。

四つ目は、あることばや言い回しを学んだら、繰り返し多様な場面で使わせるということです。ことばには様々なニュアンスを伴いますから、いろいろな場面で使うことにより一層理解が深まりますし定着も良くなります。

五つ目は、子どもの使ったことばの意味を確認するということです。例えば「覗く」ということばの場合、取り除くの「除く」と勘違いしている場合もありますし、「見る」と「覗く」の違いを理解できていないこともあります。他のことばで示させたり、動作化させる（手話で表現させる）などすることで理解も確認できますし、ことばの意味の指導にもつながることが少なくありません（DVDの2巻、3巻には指導場面が出てきますので合わせて参考にしてください）。

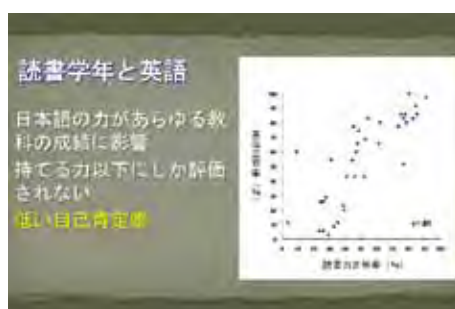


#### 4-4. 言語獲得が遅れることによる影響

言語獲得の遅れは、親子のコミュニケーションにも影響を与えます。十分なコミュニケーションが取れないために、親御さんが不安を抱えたまま子育てをしていると、子どもの情緒の安定にも影響を及ぼすといわれています。ですから乳幼児期から、「当たり前の子育て」を見通しを持ってできるようなサポートが大切です。

また、コミュニケーションが阻害されることで、多様な集団に参加するのが困難になります。社会性（年齢に応じた対人的たしなみ）の発達は、集団とのかかわりの中で育まれるものであるが、十分な参加ができないために人とのかかわりが幼劣になってしまうこともあります。

言語の力はあらゆる教科の成績と強い関係を持っています。その一例として、中学校1年生レベルの英語のテストと読み書きの力を調べた読書力検査の成績との関係を調べたものを図で示します。二つの成績の関連の強さを示す相関係数も0.81と強い関係を示しており、読み書きの力が英語の成績に直結していることがはっきり表れています。例えば国語の教科書も小学校の4年生以降になると子ども自身の経験だけでは推し量れない内容（例えば、虫の世界のことや昔の生活など）が増えてくるので、ことばを介して知識や思考を高めることが求められるようになるのです。学習そのものは理解ができていても、それを表す手立てである言語力が乏しいと、本来持っている力以下にしか評価されず、そのことが子どもの自己肯定感や学習意欲にも影響があるといわれています。



#### 5-1. 補聴器の構造と種類

補聴器は、音を増幅することで聴覚障害者の聞こえにくさを補う精密機械

## 5. 補聴器の基本

です。その基本構造は、音響信号を電気的な信号に変換するマイクロホンなどの入力部分と、電気的な信号を増幅し音質を調整するアンプなどの増幅調整部分、電気信号を再び音響信号に変換するイヤホンなどの出力部分及び電源から構成されています。

補聴器のタイプは大きく「ポケット形」「耳かけ形」「耳穴形」の3タイプがあります（その他にも眼鏡型やカチューシャを利用した骨導補聴器もあります）。それぞれの長所短所を比較してみましょう。

### ポケット型（箱形）補聴器

ポケット形は大きいしコードがある等の携帯をするうえでの短所がありますが、自分で見ながらスイッチやボリュームを確認できるので操作がしやすく、マイクを相手の口元に向けて使用できるなどの利点もあります。



### 耳かけ形補聴器

耳かけ形の場合は、耳介の後ろにつけるので目立たないしコードなどの煩わしさがないという長所がありますが、装着に慣れるのに時間がかかるなどの短所があります。



### 耳穴形補聴器

耳穴形はマイクと鼓膜の位置が近くなりますから、自然な聞こえが期待できる良さがあります。ただし、増幅された音が外耳道から外に漏れてマイクに戻るとピーというハウリングが起こります。大きな増幅をさせる場合に、耳穴形はハウリングが生じやすいという欠点があります。



どの補聴器が良いということではなく、それぞれの方の聴力や生活に合わせて補聴器を選び調整していく必要があります。



### 5-2. 補聴器の基本的な機能

### 補聴器

#### ◆感音難聴者の聞こえの特徴

- ・小さい音が聞こえない（閾値の上昇）
- ・大きい音が苦手（補充現象）
- ・はっきり聞こえない（弁別力の低下）

### 補聴器

#### ◆補聴器でできること

- ・音圧の増幅（ボリューム）
- ・音質の調整
- ・出力の制限

補聴器調整のことをフィッティングと言う  
補聴器には弁別力の低下を補う機能はない

さて、聴覚障害者の聞こえにくさとはどのようなもので、補聴器はそれに対してどのような機能があるのでしょうか。聴覚障害者の聞こえの特徴としては、「小さい音が聞こえないということ、二番目としては、感音難聴の場合に「大きな音が苦手になる」ということです。耳が聞こえないのだから音を大きくすればよく分かると思われがちですが、聞こえに障害のない人がうるさいと感じるくらいの大きさの音でも耳に響いたり頭が痛くなったりする場合があります。極端な場合を補充現象（リクルートメント現象）と言います。三番目としては、それぞれの人にとって最も聞きやすい大きさを聞いたとしても「ことばの弁別がはっきりしない」と言うことです。この症状を「聴取弁別力の低下」といいます。

これらに対して補聴器でできることは次の3つになります。

一番目は当然のことですが「音の増幅」です。マイクから入った音を大きくして提示します。増幅した分を利得（ゲイン）と言います。例えば、60 dBの入力音に対して補聴器が出力している音圧が90 dBの場合は「30 dBの利得がある」という言い方をします。二番目に「音質調整」です。人によって聞こえやすい音の高さは異なりますが、高い音が聞こえにくい人と低い音が聞こえにくい人では、増幅する音の高さをかえてあげる必要があります。その機能が音質調整です。三つ目が「出力制限」です。補聴器で小さな音が増幅される分には良いのですが、補聴器が無くても聞こえるような大きな音が補聴器で増幅されるとうるさくて使えなくなってしまいます。そのような大きすぎる音を抑えるのが出力制限です。

聴覚障害者の聞こえにくさとの対応で見ると、「音の増幅」と「音質調整」はどの周波数にどれだけ音を足してあげるかということですから小さい音が聞こえないということに対応します。また、「出力制限」は大きな音が苦手だということに対応します。このように見ると 聴覚障害児の聞こえの特徴の一つである「弁別力の低下」を補う機能は補聴器にはないということです。ですから、補聴器を装着しても「なおかつ聞き取れないことがある」ということを知っていることは、補聴器を装着している人と接するときに大切なことです。

### 5-3. 補聴器管理の基本

補聴器は精密機械ですので湿気を嫌います。体育のあとなどは乾いたタオル



ルでしっかり拭かせるようにしましょう。また寒い季節になると耳かけ補聴器の音導管に水滴が溜まることがあります。音導管が詰まると音が聞こえなくなるので、チューブを外してその中の水滴をコヨリなどでとるようにすると良いでしょう。



補聴器に用いられている電池は空気電池などであり、マンガン電池と比べると一定の電圧を保ちますが突然切れてしまうタイプのもので多いです。それぞれの子どもが何日おきに電池を交換しているかを把握しておくことで電池切れを予防できて良いでしょう。また、理想を言うなら予備の電池を学校でも準備しておけるとよいと思います。

耳かけ形や耳穴形補聴器を使用していると、ピーピーというハウリングが起きることがあります。ハウリングは補聴器で増幅された音が外耳道から漏れて補聴器のマイクにまた戻ることによって起こります。ハウリングをしている時には、それ以外の音はほとんど増幅されないため、補聴器装用の効果はなくなってしまいます。ですから、ハウリングは必ず止めないといけません。多くの場合はイヤモールドなどの耳栓がきちんと装着されていないことにより起きますので、ハウリングに気づいたら耳栓を装着しなおさせましょう。また、正しく装着してもハウリングする時にはイヤモールドを作り直してもらおうようにしましょう。

子どもが小さいときには補聴器の不調を自分で訴えることができません。小学校低学年までのお子さんを担当する際には朝の会などを利用して、毎日補聴器の音を聞いて確認してあげましょう。毎日聞いていると補聴器の音質を覚えることができますから不調に気づくことができます。

#### 5-4. 補聴器の段差

車いすは段差があると進めなくなります。このことは、初めて車いすを介



### 補聴器についての段差

- ◎距離があるとき  
補聴器で聞き取れるのは  
1～2mまでの範囲
- ◎騒音があるところ  
聴者は騒音の方が10dB大きくても、  
意味のあるやりとりは聞き取れるが・・・
- ◎早口

### 補聴器についての段差

- ◎多人数  
会議や講演会、授業など
  - ◎機械を介した声  
テレビ、館内放送など
- 対面でかなり聞き取れる子どもでも、集会などではほとんど聞き取れていない。

助する人にも分かることで、それゆえにスローブを探すなど、段差という困難に対して適切な対応が得られやすい傾向があります。補聴器にとっても同様に効果が得にくい環境（段差）があります。しかしながら、補聴器の場合、当事者がどんなに困っていても、その困難を訴えなければ、その段差に周囲の人が気づいてくれることはほとんどありません。聴覚障害とは、その困難が第三者には見えにくいという特徴を持っているのです。そのために周囲からの理解が得られず、辛い思いを強いられることが少なくありません。ですから、どのような状況が補聴器にとっての段差になるのかを、聴覚障害児と関わる方はよく知っておく必要があります。

代表的な補聴器にとっての段差を5つ紹介したと思います。第一に、距離があるときです。補聴器の場合よく聞き取れる範囲は1～2mの範囲です。3，4m離れるともう聞き取りにくくなります。一番前の席でほとんど聞き取れた子ども3列目になるとほとんど聞き取れません。このようなことは聞こえている人たちからは非常に分かりにくいことです。

二番目は騒音があるところです。聞こえている人たちは、聞きたい声よりも騒音が大きくても会話を理解できます。例えば小学校のクラスで、騒々しい状況でも隣の友達と話ができるのはその例です。ところが補聴器を装着している人にとっては、周りの騒音が聞きたい声よりも10dB以上小さくないとうまく話を聞き取ることができません。大事な話をする時には、テレビを消したり窓を閉めるなどのして騒音を減らす工夫ができると良いです。

三つ目は早口です。早口はとても聞き取りにくいです。「3-2-2. 聞き取りやすい話し方」にあることを参考に文節で区切って話すと分かりやすい話し方になります。

四つ目は、人数が多いときです。一人の人とは会話ができても会議などは難しいのです。会議のときには一人ずつ発言するなどのルールを徹底するほか、児童会や生徒会の時には座席を記録の隣の隣にして文字でも確認できるように配慮できると良いです。

五つ目は機械を介した声です。例えば、校内放送などは声が出ていることは分かっても聞き取ることが難しいです。小中学校では、校内放送があったときにはクラスメイトが聴覚障害児に放送内容などを伝えることを徹底できることが望ましいです。

これらの補聴器にとっての段差は、人工内耳についてもいえることで、騒音が大きいところや、離れたところにいる話し手と話すことは困難が生じます。補聴器や人工内耳を活用して、静かなところで向き合っている話ならでかなり聞き取れる子どもでも、全校集会などではほとんど聞き取れていないことが少なくありません。

## 6-1. 補聴援助装置の活用

## 6. 補聴器の限界を補うために

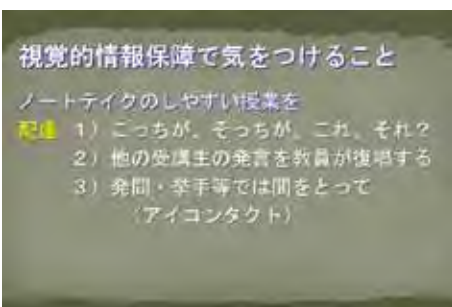
十分に力を発揮できません。これらの問題を解決する方法の一つに補聴援助システムの活用があります。

補聴器にはマイクから入った音だけでなく、内蔵されているテレコイルに届いた電磁波による入力ができるものがあります。この機能を活用して話し手の口元にあるマイクから補聴器の直接音を送るのが補聴援助システムです。従って、このシステムを活用すると騒音があってもマイクからの声だけが届きやすくなります。

ろう学校や公共の施設（劇場や会議室など）には、マイクから入力された音を赤外線子どもたちの受光器にとばして、電磁波としてそれぞれの補聴器に届けるようになっているタイプのものや、同様のもので磁気ループによって電磁波を補聴器に届けるシステムがあります（これらのシステムをろう学校では「集団補聴器」という呼び方をしているところもあります）。

赤外線や磁気ループのシステムは、複数の聴覚障害児が集まるところでは有効ですが、部屋に敷設するなどの大がかりなものになります。通常の小中学校にいる聴覚障害児の場合は、先生のマイクからFM電波をとばして直接補聴器で受けるFM補聴器を利用している場合が少なくありません。

補聴援助システムは、聴力によって有効性に個人差がありますが、ひとりでも有効な子どもがいるときには、必ず使うように心がけたいものです。



### 6-2. 視覚的情報保障で気をつけること

聴覚障害児のいる学校では、補聴援助システムだけでなく、ノートテイクやパソコンテイクなど文字による情報保障を行うところが増えてきています。テイクは、授業などの内容を耳で聞くだけで逐一黒板などを確認する時間的余裕はありません。ですから、授業をするにあたって「あっち」「こっち」など黒板や教材を見ないと理解できないような話し方は慎む必要があります。「右に行くほど値が大きくなる」など言語化して話すようにしましょう。また、他の児童生徒の発言を教員が復唱するとテイクが追い付きやすくなりますし、発問をするときには、テイクが文字提示し終えたことを授業者が確認してから、挙手を求めるなど等の配慮もできると望ましいです。

配付資料に小見出しをつけたり、箇条書きの文頭に数字をふったりなどすると、資料の箇所を早く示すことができ円滑な情報保障が提供しやすくなります。これらのことは、少しの配慮でだれもができることです。是非取り入れてください。

通常の補聴器を用いても効果が得られないような最重度の聴覚障害児・者が聴覚を活用する手段として人工内耳があります。通常の補聴器が内耳に空



## 7. 人工内耳

接内耳の聴神経を電氣的に刺激する装置です。



人工内耳は、体内部のインプラントと体外に装着する、スピーチプロセッサと呼ばれる二つの部分から成り立っています。

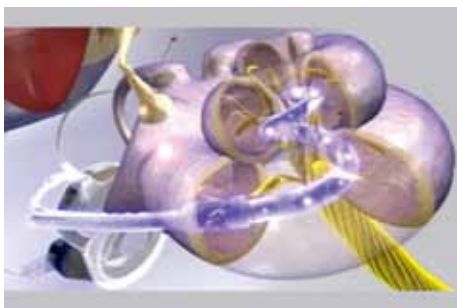


スピーチプロセッサにある小型マイクが拾う音は、コード信号に変換され、送信コイルに送られます。送られた信号は、送信コイルから、皮膚の下のインプラントに送られます。



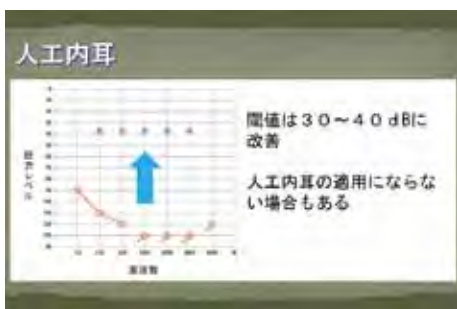
体内部のインプラントは、コード信号を電気信号に変換し、電極アレイに送ります。

これが、蝸牛にある聴神経線維を刺激し、大脳で音と認識されます。



人工内耳を装着しての聞こえ方は、補聴器では改善することの難しかった高帯域も含め、閾値がおおよそ30～40dBの軽度から中度の難聴に改善することわれています。ただし、聴神経から中枢に重い障害がある場合や、蝸牛の奇形や変成のために電極を埋め込むスペースがない場合には人工内耳の適用にならない場合もありますし、ことばの弁別の改善に関しては個人差が大きいと言われています。

最近の研究で、人工内耳をより早期から装用することで発音の明瞭さや音への反応が良くなることが報告されており、人工内耳装用児は今後急増すると予想されます。人工内耳の効果を最大限に引き出しながらも、発音などの表面的な発達だけに目を奪われるのではなく、言語を身につけるあるいは言語で考える力を育てるといった教育の役割を忘れず新しい教育の在り方を模索していく必要があります。



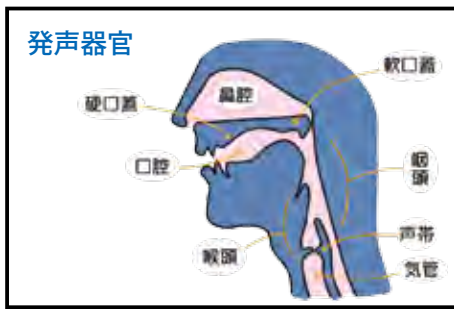
### 8-1. 発声器官



## 8. 発声・発語の基本

るので不明瞭な発音になります。発声発語を指導することは、単にコミュニケーションを円滑にすると言うだけでなく音韻意識を育てるという意味も持っており、読み書きことばの習得に関連して聴覚障害児教育においては重要なものです。ただ、発声発語の指導をすることは、かなりの専門性と経験を要します。ここでは実際の指導に入るための予備知識の整理をしておきたいと思います。

さて、声はどのように作られるのでしょうか。まず肺から送られた呼気が声帯を振動させます。このときには、ただのブーという音が作られます。これを口頭原音と言います。その音が口腔、鼻腔で共鳴して音声を作られます。声帯で生まれた口頭原音が音声として外に出されるまでの通り道を声道と言います。



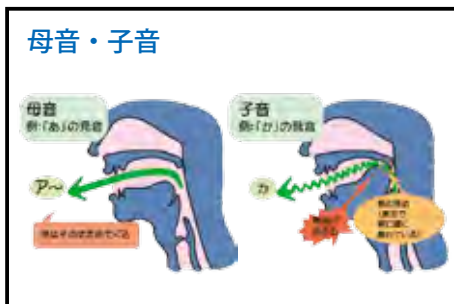
### 8-2. 母音・子音と調音点

母音は日本語では「アイウエオ」の5つの音のことです。また子音とは「カキクケコ」のKの音や「パピプペポ」のPの音のことを指します。母音と子音は何が違うのでしょうか？

母音「ア」をのばして言ってみましょう。母音は「ア」でも「イ」でも「ウ」でも「エ」でも「オ」でもそのままのばして言うことができます。それに対して「カ」をのばして言うことはできるでしょうか？「カー」とのばしても結局伸びるのは子音Kの後に続く母音の「ア」だけと言うことがわかります。ということは、母音は音色の違いと見ることもできますので、共鳴する声道の形は母音ごとに異なりますが、同一母音の発声途中で声道を変化をさせる必要はありません。ところが、子音は声道のどこかで狭めをつくって呼気を止めたり流れを妨げたりしています。呼気の狭めを作るときにある種の雑音が生じます。それが子音です。ですから、子音の部分を伸ばすことはできないのです。子音は声道のどこかに狭めの位置があるということになります。その狭めの位置を「調音点」とか「調音部位」、あるいは「構音点」と言います（この本の中では調音ということばで記しています）。

例えば、「パ」のPの音の調音点はどこにあるのでしょうか？唇をあげたまま「パ」と言えることはできるでしょうか？言えないですね。すなわち「パ」という音を作るためには唇で狭めを作る必要があります。すなわちPの音は唇が調音点ということになります。同様に「タ」のtの音は舌の先を歯茎の裏側にくっつけて「タ」という音を作っています。「カ」は舌の奥の方を軟口蓋（上あごの奥の部分で柔らかいところ）とくっつけることにより音を作っています。子どもたちの発音練習をする際には、それぞれの語音がどこに調音点があるのを見極めて指導していく必要があります。

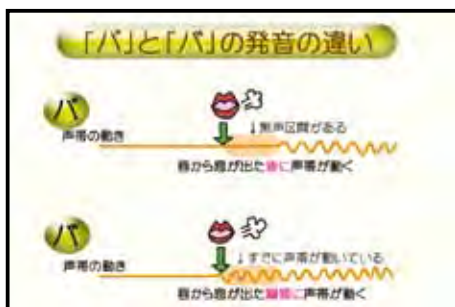
一般的に聴児の構音は調音点が唇にある音からはじまって奥にある音に向かって発達すると言われていています。ただし聴覚障害児の場合は必ずしもそうではありません。



### 8-3. 調音様式と有声・無声

次に、「マ」と「パ」の音について考えてみましょう。どちらの音も調音点は唇になります。ところが「マ」と「パ」は音が違います。さて、どこが違うのでしょうか？

「マ」のmの音を声にすると「ム」と似た音になり、鼻から息を出すことができます。「パ」の場合は鼻から息を出しながら言うと「ファ」というような「パ」とは違う音になってしまいます。すなわち「マ」と「パ」は調音点が同じでも息の流れが違っているのです。この違いを「調音様式」あるいは「調音方法」の違いと言い表します（「構音様式」、「構音方法」ともいいます）。「マ」は鼻から抜く音ですから調音様式は「鼻音（びおん）」となりますし。「パ」の調音様式は一度息をストップさせるので「破裂音」となります。鼻から抜けるべき息がちゃんと抜けているか、あるいは抜けてはいけないうちに抜けてないかという観点で子どもの発音を見ていく必要があります。



次に「バ」と「パ」を比べてみましょう。「バ」の音も「パ」の音もやはり調音点は唇です。そして調音様式もいずれも鼻には抜けず息を一度止める破裂音となります。「バ」と「パ」は調音点も調音様式も同じということになります。しかし音は違いますね。何が違うのでしょうか。「バ」と「パ」の違いは唇から息が出た瞬間には声帯が動いているか、それとも息が出たあとに声帯が動き出すかの違いです。のど仏のあたりを手で触りながら「バ」「パ」「バ」「パ」と言ってみるとわかるのではないのでしょうか。

唇から息が出たときに声帯も動いている「バ」のbの音を有声音、息が出たときにはまだ声帯が動いていない「パ」のpの音を無声音と言います。

母音、調音点、調音様式そして有聲無声について説明しました。これらの観点から子どもの発音の誤りに気づくことができれば指導の方針も立てやすくなるはずです。普段から教員自身が自分の発音に注意を向けると調音点や調音様式についての理解も深まるのではないのでしょうか。

#### 8-4. 音韻意識を育てる

発声発語の練習は自立活動などの個別指導の時間に丁寧に行うことはもちろんですが、普段の教科指導等の中でも随時行う必要があります。例えば動物の「キリン」のことを「チリン」と発音している子どもの何割かは文字に書かせても「チリン」と書いたりします。このような場合は「キ」と「チ」をしっかりと聞かせて聞き分けることができるかを確認します。聞き分けられるなら聞き分けた音に文字などの視覚的手段を併用しながら発音の指導もします。仮に聞き分けられなかったとしても自分なりに「キ」と「チ」は違うという音韻の意識をつけるために調音点などを意識させて発音させる練習をします。

発音の明瞭さは語音を聞き分ける力と相関が高いので、どこまで発音を改善できるかは個人差があります。ただし、音韻意識を育てる意味では視覚的手段も併用しながら発音指導をすることは意味があります。



#### 9-1. 読み書きことばと手話

## 9. 読み書きことばと手話

手話は、日本語とは異なる言語です。しかし、書きことばを持っていません。このように書くと、手話は劣った言語のように感じるかもしれませんが、世界にある自然言語（6000以上）のうち高度な書きことばを持っているのはたった70程度とされています。書きことばを持たない言語の方が多いわけです。ですから、手話が書きことばを持っていないからといって劣ったものとすることはできません。手話は聴覚障害者にとって大切な言語であることに間違いのないのです。

ただし、現在日本で用いられている読み書きことばは、話しことば（日本語）を書き表しているわけです。赤という手話は唇を人差し指でなぞりますが、そこには「あ」「か」と二つのかな文字で表す必然性は全くないわけです。音声で「あか」という二つの音節で言うので二つの文字で書いているのです。ですから、読み書きを円滑に行うためには、頭の中では日本語を駆使する力を聴覚障害児に身につけさせる必要があります。

日本語を身につけさせるにあたって、大きく二つのアプローチがあります。ひとつは聞こえにくいながらも聴覚を活用して、日本語を日本語のまま学習していく、あるいは出来る限り保有する聴覚を活用ながら言語をできる限り獲得をさせて、その上で学習で補っていくというアプローチです。

もうひとつは、まず手話でなら年齢相応のことが十分にやり取りできる力を身につけさせて、その上で第二言語として日本語の書きことばを指導していくアプローチ（バイリンガルろう教育）があります。いずれにしても、それぞれの子どもの聴力や言語環境などを考慮して、最も負担の少ない手段を見極めて指導していくことが大切だと考えます。

### 手話には書きことばがない



### 手話には書きことばがない

読み書きを円滑に行うためには、頭の中では日本語を駆使する力を身につけさせる必要がある

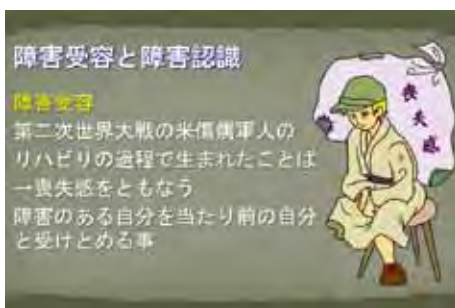
二つのアプローチ

1) 聴覚を活用して、日本語を日本語のまま学習

2) 手話の力をベースに第二言語として

## 10. 障害の受け止め

### 10-1. 障害受容と障害認識



#### 障害認識について

聞こえない（聞こえにくい）のが当たり前の世界→聞こえる世界を知らない

大多数が聞こえているこの社会（聞こえると便利な社会）で暮らすためには、聞こえないために生じる不利益を認識し、改善する方法を学ぶ必要がある

「障害受容」も「障害認識」も障害の受けとめを表すことばですが、厳密には意味するところが違います。障害受容というのは第二次世界大戦の傷痍軍人のリハビリテーションから生まれてきたことばです。例えば地雷のために足を失って歩けなくなったというように、以前できていたことが障害を受けたことによって、できなくなったとか、あるいは自由にならなくて苦しいと言った、何らかの「喪失感」を伴うものとされています。以前は聞こえていたのに、今は聞こえなくなって聞こえない自分を当たり前自分と受け止めていくこと。それが障害受容ということになります。ですから障害受容は中途失聴者に用いると当てはまることばです。

障害に対して「受容」ということばが用いられた初期の研究は、身体像の障害（例えば、切断患者の多くが既に無くなっている脚をかゆいと訴えたりすること）を経験することに関するもので、身体的統合（受傷後の体を自分のからだとして認識すること）が中心でした。それが、1960～70年代になると障害を受けて以後の心理的回復過程に障害受容ということばを用いるようになりました。障害児を持つ保護者の心理的回復の場合も、障害のある子どもが当たり前の我が子であると受けとめていくためには、何らかの喪失感を乗り越えなくてはならないプロセスがあると考えられます。ですから、障害受容は保護者にも用いられることがあります。

それに対して、生まれつきまたは非常に幼い時期から聴覚障害がある場合はどうでしょうか？聞こえない自分を当たり前自分と受け止めていくことに何らかの喪失感が伴うのでしょうか？その答えはきっと否でしょう。生まれたときから聞こえないのだから、聞こえない自分が当たり前自分だとはじめから感じているはずですが。

では、障害の受けとめに関してなんら課題がないかといえばそういうわけではありません。聞こえないことが当たり前の世界にいるということは、逆の言い方をすると「聞こえる世界を知らない」という言い方もできます。実際に子どもたちが生活しているこの社会は、大多数の人たちが聞こえている社会で、聞こえていることが前提になっている（聞こえると便利な）社会です。この社会で暮らすためには、聞こえないために生じる不利益を自ら認識し、改善する方法を学ぶ必要があります。それを「障害認識」と呼びます。障害認識は、今日ではろう学校でも難聴特別支援学級、通級指導教室でも「自立活動」というカリキュラムの大きな柱となっています。



## 10-2. 自己受容と社会受容

## 真の障害受容

## ◎自己受容

障害のある自分を当たり前自分として受け入れること

## ◎社会受容

障害のある人を仲間として受け入れること  
→同僚として、家族として

障害を受容するのは聞こえる人たちも

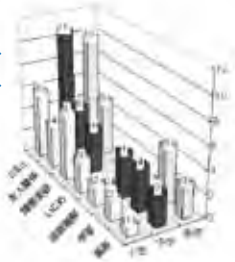


「障害受容」の著者である南雲は、障害受容の中での苦しみを、「自分の中から生じる苦しみ」と「他者から追わせられる苦しみ」の2つに分けて、前者の苦しみに対する受容を「自己受容」、後者の苦しみに対する対応を「社会受容」と整理して、社会受容の重要性を強調しています。すなわち、障害の受容を本人の努力だけに負わせるのではなく、障害者を周囲の者が当たり前の友人や家族として心から受け入れることが真の障害受容につながると述べています。

そのように考えると、障害を受容すべきは、中途障害者や保護者だけでなく、通常学級の先生、そしてこのDVDをご覧のあなた自身ということになります。聴覚障害児を当たり前の子ども、当たり前の教え子としてとらえることができているか、もしできていないとするならばそのことを受け入れていくプロセスはまさに障害受容の課題ということになります。

保護者を支援していく時にも、例えば些細なことで泣き出したり、イライラされたりということがあると思います。その時に、「涙もろい」とか「怒りっぽい」とその親御さんの性格として捉えるのか、障害受容のプロセスにあるととらえるかでは、教員としての専門性は大きく違ってくると思います。障害受容のプロセスについても今後関心を持って学んでほしいと思います。

## 10-3. 障害認識に関して

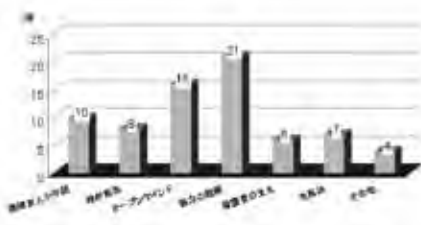
障害のことで  
いつごろ何で  
悩んだ？

幼児期において既に重度の聴覚障害（90 d BHL以上の聴力）があり、小学校や中学校で統合教育を経験した聴覚障害成人を対象に、障害認識に関わるアンケート調査を行ったことがあります。有効回答数は102名でした。その中から障害認識にかかわるいくつかの項目を紹介したいと思います。

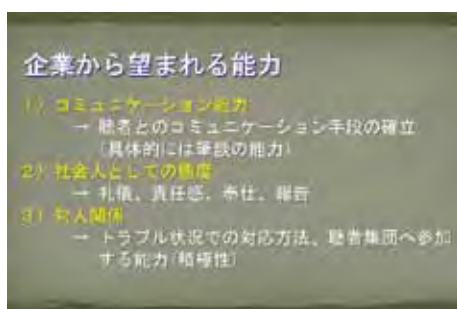
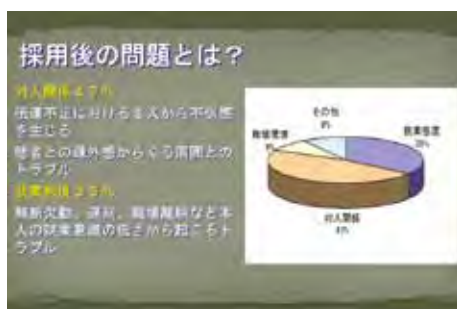
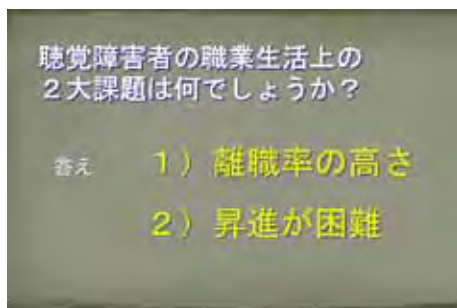
「自己の障害のことで、とても悩んだことがありますか？」の質問に対して「はい」とする回答が73.5%もありました。そして「はい」と回答した者に対して悩んだ時期について尋ねたところ、中学校時代をピークに小学校から高校とする回答が最も多く、約4分の1はすでに小学校時代に「とても悩んだ」としていました。次に、「悩んだ事柄」に関する質問では、いずれの時期もコミュニケーションに関することが一番多く上がりました。コミュニケーションの悩みの中には聞き取れないことに関するものもありましたが、「自分の声に自信が持たなくなって恥に思うこともあった」など発声や発話に関わる悩みも多くみられました。中学・高校時代は友人関係、学習、進路に関する悩みが相対的に多くなり、特に学習は年齢が進むにつれて悩んだ事柄に挙げる者の割合が増える傾向がありました。一方、小学生時代の悩みは「なぜ自分だけが苦しいのだろう」といった記述が多く、問題が未整理のまま悩んでいることが特徴でした。

「悩みをどのように乗り越えたか？」に関する質問では、（周囲から）協力を得ることができた経験が一番多く、次いでオープンマインドに努力したという回答やろう者や手話との出会いを挙げたものが多くなりました。いずれにしても「ひとりの大切な人として受けとめてもらった経験」が悩みを解決していく糸口になっているようです。

## 悩みをどのように克服した？



## 11. 聴覚障害者の進路・職業問題



### 11-1. 採用後の課題

ろう学校の高等部3年生の進路は、平成15年に大学や専攻科への進学が就職を上回るようになり、その後も進学と就職者の数は拮抗するようになっています。聴覚障害者は、これまで障害者雇用促進法により大手製造業の生産部門を中心にかなり多くの生徒が就職しており、他の障害よりも高い就職率を残してきました。また、医療専門職への法的な門戸が開かれ、より高度な技術と専門的知識を求められる職種へ従事するなど聴覚障害者の携わる業務は一層高度専門化してきています。

しかしながら、聴覚障害者の職業上の2大課題というのがあります。それは何でしょうか？まず一つ目は離職率の高さです。聾学校は他の障害種と比較しても高い就職率を示しています。ですから就職はできるのですが定着率が低く、すぐに離職してしまっているわけです。二番目の課題は、より専門的な分野に進んだ人たちも含めて、聴者と同じだけの能力を持っているにもかかわらず、なかなか昇進ができないということです。

### 11-2. 企業から望まれる能力

ろう学校を卒業した生徒を採用した全国の企業にアンケートを行ったところ、「採用してみて問題があった」と答えた企業は54.7%にもぼりました。どのような問題があったのかを尋ねたところ「対人関係に起因する問題」47%、「就業態度に関する問題」35%という結果でした。

対人間関係というのは「伝達不足による不信感」や「聴者の中での疎外感」からトラブルが起きるといえるもので、就業態度では無断欠勤、遅刻、職場離脱など本人の就業意識の低さから起こるトラブルという回答でした。

それで、企業が学校で身につけてほしいと希望している能力は、大きく3つあります。一つは、筆談等を用いて聴者との「コミュニケーション手段を確立する力」です。二つ目は、礼儀や責任感といった「社会人としての態度」、三つ目がトラブル状況での対応方法、や聴者集団へ参加する積極性といった「対人関係」の能力でした。

読み書きの力を育てることは、聴覚障害児教育の中で一貫して重要なものとして取り組んできていますが、高校生になっても十分な力を育てることができない者も少なからずいます。今後も丁寧な言語指導は進路指導の観点からも重要ですが、それと同時に、仮に正しい文章が書けず単語の羅列になったとしても、筆談をしようとする姿勢や聴者の中に積極的に入っていこうとする態度を育てることが併せて求められているのです。

## 12. これから聴覚障害児にかかわる先生方へ



おわりに、二つのことをお願いしたいと思っています。

一つ目は、校内研修にとどまらず、他の専門機関で行っている言語指導や評価法そして人工内耳、補聴器などの研修に、身銭を切っても参加してほしいということです。聴覚障害児教育を支える医学や工学、心理学そして様々な制度の変化は非常に早いです。教員としての敏感なアンテナをはって自らを磨き高める努力を忘れないでほしいと思います。

二つ目は、聴覚障害のない方に特にお願いしたいことですが、聴覚障害者の友人を作してほしいということです。コミュニケーションの困難は聴覚障害者の耳にあるわけではありません。コミュニケーションを取ろうとするお互いの間に生まれるものです。聴覚障害の友人を作ること、お互いが共有する困難を積極的に担える人になってほしいと思います。また、聞こえない人たちからの示唆は、聞こえることが当たり前の世界にいるわれわれの物の見方に違う方向からの光を与えてくれます。そのことが、子どもたちの可能性を多面的で豊かなものに広げてくれるはずで。

最初は自分の伝えたいことも伝わらないし、子どもの言っていることも分からないという経験をするでしょう。しかし、この経験こそが皆さんを本物の教員に育ててくれるはずで。この苦勞を楽しむくらいのつもりで頑張ってください。

## &lt;文献&gt;

- 岩本朋恵, 濱田豊彦 2007  
聾学校高等部卒業生の課題と就労支援について  
— 職場での課題と卒業後の支援の現状 —  
東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 58, 329-338.
- 大杉豊 1999  
統合教育が筆者の自己像形成に及ぼした影響  
— 聾者としてのポジティブセルフ獲得の機会剥奪 —  
S N Eジャーナル, 4, 1, 125-138.
- 小田侯朗著 2006  
聴覚障害教育におけるリテラシーと手話活用  
音声言語医学, 47, 3, 294-297、2006
- 草薙進郎、四日市章 1996  
聴覚障害児の教育と方法 コレール社
- 酒井邦嘉 2002 言語の脳科学 中公新書
- 篠田達明 2005  
視覚・聴覚・言語障害児の医療・療育・教育 金芳堂
- スティーブン ピンカー 1995  
言語を生まだす本能〈上〉〈下〉NHKブックス
- 須藤貢明 濱田豊彦 荒木紫乃 1997  
聴覚障害児の残存聴力の活用 教育出版
- 田原佳子 2001  
健常児と共に生きる難聴児への難聴学級からの支援  
聴能言語学研究,18, 2, 117-123.
- 長南浩人 2005 手話の心理学入門 東峰書房
- 中村満紀男 荒川智 2003  
障害児教育の歴史 明石書店
  
- 南雲直二 2002  
社会受容 — 障害受容の本質 — 荘道社
- 濱田豊彦 1998  
難聴児の聴覚活用の発達に関する研究 風間書房
- 濱田豊彦 2005  
聾学校の自立活動における諸問題(1)  
— 「言語力」と「コミュニケーション」を中心に—  
聴覚障害 vol.60, 4, 20-27
- 濱田豊彦 2005  
聾学校の自立活動における諸問題(2)  
— 「障害認識」と「社会性」を中心に—  
聴覚障害 vol.60, 5, 43-48
- 濱田豊彦 間根山祥行 2007  
早期から聴覚を活用した教育を受けた聴覚障害者の自己肯定感  
に関する研究  
— 当事者とその保護者へのアンケート調査を通して —  
ろう教育科学, 49 (2) , 21-39.
- 濱田豊彦 2007  
一人一人に応じた教育 — 聴覚障害I —.  
大南英明、宮崎英憲、木船憲幸編著  
放送大学教材 特別支援教育総論. 日本放送出版協会、42-56.
- 濱田豊彦, 高木恵, 大鹿綾 2008  
聴覚障害児の読書力と英語の学習効果に関する研究  
東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 59, 379-386.



## DVD第2巻

### 教育現場での工夫・配慮事項



DVD第2巻では、教育現場で実際に行われている指導の工夫、配慮事項を、都立ろう学校を例に映像でお伝えします。理解を深めるため、良い例・悪い例と、ネガティブな映像も交えています。悪い例の画像には赤い枠を付けていますご注意ください。

撮影は、都立大塚ろう学校、都立立川ろう学校において行いました。また、参加している幼児・児童・生徒は日常担当しているお子さんと異なるケースが含まれます。

## 1. 教室環境（1） 机の配置（馬蹄形）



ろう学校では、通常の小学校とは、机の並べ方が違います。写真のような机の並べ方を『馬蹄形』に並べると言っています。なぜ、このような形に机を並べているのか、理由を考えてみましょう。



### ①机をまっすぐに並べた場合

写真のようにまっすぐに並べた場合は、発言している手話や子供の口などをよく見ることはできません。したがって、発言をしている子供の話を理解しようと、他の子供達は、前に身を乗り出す形になってしまいます。これでは、意見交換に時間を要することになり、授業が円滑に進みません。



### ②机を馬蹄形に並べた場合

机を馬蹄形に並べた場合は、お互いの手話や口形などがよく見えるようになります。お互いの意見がスムーズに理解できることにより、意見交換が活発になります。



### ③幼稚部の場合

幼稚部の場合は、机がないので、小学部と同様にいすを馬蹄形に並べます。小学部に比べ、距離が近くなっていますが、その意図は小学部と同じで、お互いに見合うことが出来るようにするためです。

## 2. 教室環境（2） 掲示物



ご覧いただくと、通常の学校にくらべて掲示物が多いことに気づくことと思います。どうして、このように掲示物が多いのでしょうか。掲示物の内容を見ながら、確認していきましょう。



### ①言葉に関する教材

この内容は、ろう学校の子供にとって定着しづらい内容です。黒板の上に掲示することによって、子供たちは、すぐに確認することができ、繰り返し活用することで定着につながります。

このようにろう学校の教室には、児童が自ら確認できるように掲示が工夫されています。



### ②行事の掲示物

ろう学校においては、体験的な活動である「行事」は、子供たちの経験を増やすだけでなく、言語獲得につながるやすいというねらいがあります。経験した行事を言語化し、定着できるようにするためには、掲示は重要です。

画面の掲示物は、行事など経験した内容を文字化や文章化して、表しています。掲示を通じて、活動の言語化を促していきましょう。



### ③教材の掲示

写真の掲示物は、現在学習している内容の掲示物です。現在学習している内容を掲示することで、子供が自ら学習内容を振り返ることができます。また、現在の学習内容の掲示だけでなく、既習内容の掲示も重要です。今後の学習の基になる基本的な既習内容や現在学習している内容を掲示することで、子供が自ら学習内容を振り返ることができます。これにより新しい学習内容の理解につながります。



### ④図書のコナー

ろう学校の教室には、写真のように図書が多く置いてあります。

聴覚障害児にとって、文字情報である本を充実させることは、とても重要です。準備する本としては、幼児・児童・生徒が興味をもつ物語、季節に関する本、そして、教科に関連した内容等の本です。学年が上がると、図書の充実調べ学習にも活用できます。





### ⑤ 掲示する際の留意点

#### <掲示場所の区分>

掲示するときは、表題をつけるなどして、整理して掲示します。

整理することで、子供たちが必要な情報を速やかに得ることができます。

#### <情報の取捨選択>

多くの情報を伝えたいと思い、掲示物が多くなりすぎることがあります。情報が多すぎると、子供たちは、多くの情報から必要な情報を探し出すことが難しくなります。時機、季節等、量、等を考えて、掲示しましょう。



### ⑥ 幼稚部の教室

幼稚部の教室も、ろう学校ならではの特徴があります。

幼稚部の教室では、「日めくりカレンダー」や「月のカレンダー」を掲示することが多くあります。抽象的な日にちや時間の感覚を身に付けるために、日めくりカレンダーや日時に関する言葉の文字カードを掲示しています。

朝の会などで毎日活用しますが、これは幼児が1日の流れを理解して、見通しをもって活動に臨めるようにするためです。



### ⑦ 絵カード

幼稚部では、物や場所の名前、等を記入した絵カードが用意されています。

視覚的な教材を用意することによって、物の名前を覚えたり言葉の意味を理解できるようにしています。

カードは、物の名前、場所、身近な人の名前など、分類してあります。また、保育中いつでも確認できるように、すぐに手が届くところに準備しておくことが重要です。いつでも保育中に活用できるように子供が見える場所に掲示しておきましょう。



### ⑧ 図書コーナー

幼稚部でも小学部と同様に保育内容や季節・行事などに合わせた本を置いています。



### 3. 教室環境（3） 補聴器



#### ①補聴援助システム

ろう学校の教室には必ずこの補聴援助システムが設置されています。

補聴援助システムは、複数のシステムがあります。都立ろう学校では、主にループ式補聴援助システム（写真）と赤外線補聴援助システムが使われています。今回は、マイクとアンプの使い方について説明します。



#### ②マイクの使い方

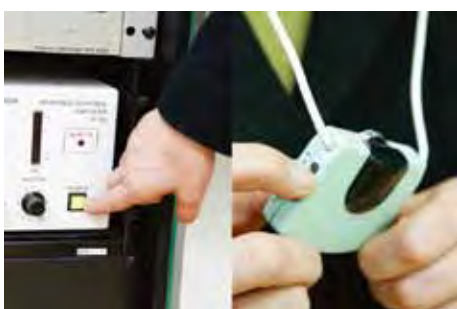
マイクを手を持っていては授業に支障が出るので、マイクを装着します。装着には、マイクを袋に入れて首から提げる、マイク本体をポケットに入れる、等の方法があります。大切なことは、口からマイクの距離が、およそ15センチ程度、胸の辺りにつけることです。

マイクのスイッチを入れます。このときマイクの電池が切れていないか確認します。写真の機種はランプが点灯していれば大丈夫ですが、ランプの点滅又は色で電池切れを警告する機種もあります



#### ③マイクの音量の調整

アンプのスイッチを入れます。マイクとアンプの電源が入っていることを確認した後、マイクの音量が子供たちに適切に届くようアンプのレベル調整をします。声を出して、メーターが、赤を超えないように、調整をします。このときに、授業で話す声の大きさを調整するようにしてください。必要以上の声を出すことはありません。必要以上に大きな声を出したり、マイクに近づけて声を出したりするとレベルメーターは赤を超えるので注意しましょう。



#### ④補聴援助システムの作動確認

補聴援助システムが適切に作動しているか、モニターを通じ、確認します。

モニターの方法はシステムにより違いがあります。今回は、赤外線補聴システムのモニタリングを見てください。

- i) 受光器を装着する。
- ii) 電源を入れ、モニター用のイヤホンをさす。

- iii) 音を確認する。

ループ式補聴援助システムは、ループモニターで確認してください。

補聴援助システムの確認は、毎朝行うようにしましょう。

補聴器について

補聴援助システムを活用するためには、子供たちの補聴器も正しく管理する必要があります。子供の補聴器について確認します。





### ⑤補聴器のスイッチ

ループ式、赤外線式、いずれの集団補聴システムの場合も補聴器のスイッチをMTにするように指導してください。なお、ボタンを押すことによって、MTに切り替わる補聴器もあるので、子供の補聴器の切り替え方を把握して、指導してください。

スイッチ位置 M：マイクからの音のみを増幅します

MT：マイクからの音とテレコイルの音を増幅します

T：テレコイルの音のみ増幅します



### ⑥補聴器の点検

子供の補聴器が正しく作動しているかどうか確認する必要があります。補聴器の点検は、次の通りに行います。

i) 電池を出して、電池チェッカーで残量を確認します。

ii) ステゾスコープで、実際に補聴器から出ている音を確認します。自身の聴覚を傷つけないよう、ボリュームに注意して下さい。

この点検は、子供たちの状況に応じて、自分で行うように習慣づけることが大切です。



### ⑦ハウリング

授業をしていると、「ピー」という高い音が聞こえることがあります。この音は、補聴器から出ているもので、ハウリングと言います。原因は、補聴器の音が、イヤモールドの隙間から漏れているためです。ハウリングが聞こえたときには、次のように対処します。

ずれたイヤモールドを正しく耳に入れるとハウリングは止まります。また、ボリュームがいつもより大きくなっていたり、イヤモールドが、古くなりサイズが小さくなっていたりするとハウリングは起きます。

※成長の度合いによりますが、幼稚部幼児は3カ月～半年、小学部児童は半年～1年程度でイヤモールドが合わなくなります。

福祉制度を利用して作り直しが必要です。

このように、ろう学校の教室には、いろいろな特徴があります。このことを理解して、教室環境を整備し、授業に当たりましょう。



## 4. 話し方やとり（1） 話す姿を見せる



ろう学校の子供たちは、主に視覚をとおして相手の話を読み取っています。その際の重要なコミュニケーション手段の1つとして「手話」があります。ろう学校の教師は、その専門性の一つとして、正しい手話を身に付けて子供たちと話ができるようにする必要があります。



しかし、手話を使えるようになることだけが、ろう学校の教師に求められる技能ではありません。ろう学校の子供たちの負担を最小限にするために、そしてわかりやすい話し方をするためには、様々な配慮が必要です。

これから、ろう学校の授業において、子供たちに話したり、子供たちと会話したりする際の注意点について説明します。



**①視覚をとおして相手の話を読み取る子供たちに対して、話し手は自分の姿をはっきり見せることが大切です**

ろう学校以外の学校では、教師が黒板の方を向いて板書をしながら話す姿がよく見られます。聴覚に障害のない子供たちは、その話を聞き取ることができますが、ろう学校の子供たちの場合、そのような話し方をしたのではまったく伝わりません。



**②子供たち全員から見えやすい位置に立つことも重要です**

これを教師の立ち位置といいます。教室の中を歩きながら話したり、無造作に立ち位置を変えたりすると、子供たちにとってはとても見えづらい状態になります。



**③個別の質問に答える時**

教師が特定の子供に近づいて説明すると、他の子供たちからはとても見えづらい位置になってしまいます。



#### ④教師と子供との距離のとり方にも気を配りましょう

教師と子供との距離が近すぎると、やはり子供からは教師の姿が見えづらい角度になります。教師の顔がはっきりと見える距離と高さに気をつけましょう。



#### ⑤明るさに気を配ることも大切です

もちろん暗くて見えづらい状態は困りますが、ただ明るければよいということではありません。

光を背にして逆光になると、子供からは教師の姿が暗く見えたり、まぶしすぎたりします。屋外での授業の際にも太陽や光源の位置を考えて、話す位置に配慮しましょう。



#### ⑥話し手の近くに動くものがあると、子供たちにとって気が散る材料となります

複数の教師で授業する場合などでは、どの教師が話しているのかをはっきりと示し、話している教師のじゃまにならないように、他の教師の立ち位置や動きに気を付けましょう。子供たちの視界の中で、何か動いたり、動かしたりすると、子供たちはつい動いている物の方に視線が向いてしまうものです。

このように、子供たちと話すときは、子供たちとの距離や角度、明るさや周囲の環境に気を配り、適切な立ち位置で話すことが大切です。



## 5. 話し方やとり（2） 視線を引きつける



聞こえる子供たちならば、何か他のものを見ながらでも話を聞くことができますが、ろう学校の子供たちは教師を見なくては話を読み取ることが出来ません。教室の子供たち全員に、しっかりと話の内容を伝えるためには、全員の視線が、教師に集まっていなくてはなりません。

ろう学校の授業では、常に子供たちの視線に注意を払い、子供たちの視線をひきつけて話すことが大切です。



### ①特に話し始めに注意を促すことは大切です

子供たちがまだ他のものを見ているとき、見る準備ができていないときに話し始めてしまうとどうでしょうか。教師を見ていない子供たちにとって、いつの間にか話が始まっていることとなります。全員の子供に話を伝えようとすると、あとで何回も言い直さなくてはなりません。

子供たちに教師に注目するよう促し、全員の視線が集まるのを待ってから、話し始めるようにしましょう。



### ②子供たち全員の視線を教師に集めてから話し始める

例えば、説明をはじめたときに、教科書やプリントなどを見ている子供がいたとします。そのときには教師に注目するよう促す必要があります。まだ準備の終わらない子供、おしゃべりをしている子供、別の何かに気をとられている子供など、いろいろな場合がありますが、子供たち全員の視線を教師に集めてから話し始めることが大切です。



### ③発言する子供に注目させる習慣をつけさせましょう

授業を進める間も、視線が他にそれてしまう子供が出てきます。教師は、子どもたちの視線が話し手に集まっているかどうか、常に気を配らなくてはなりません。

子供たち同士も同様です。子供に発言させる際には、誰が話すのかを明確にして、発言する子供に注目する習慣をつけさせましょう。「今、〇〇さんは何と言ったの?」と、友達が話した内容を再確認する問いかけも必要です。



#### ④プリント等を配るときにも配慮が必要です

プリント配られた子供たちは、まずそれを読みたいという気持ちになります。子供たちがプリントに視線を落としているときに説明したのでは、子供たち全員に教師の話を伝えることが出来ません。



プリントは最後に配るか、あるいは「一度プリントを裏返しにして前を見てください。」と指示をして、話しをする教師に視線を集めるようにしましょう。良い授業ではいつも子供たちが「今、何を見なくてはいけないのか」ということがはっきりしています。



#### ⑤子供たちの視線を引きつけ、興味をもって話を聞ける話し方を

長い時間、教師の話を見続けることは、子供たちにとっては大きな負担です。ろう学校の教師は、子供たちの視線を引きつけ、興味をもって話を聞けるよう、メリハリのある話し方を工夫する必要があります。

例えば、文字カードや実物などの教材を提示するときも、いきなり全部見せてしまうのではなく、「虫食い」や「伏せ字」にしたり、一部を見せて他の部分を予想させるなど、興味をもって注目するような提示の仕方をするとうまいでしょう。

常に、子供に疑問を投げかけ、考えさせることで、子供たちが興味や関心をもって話に注目させることが大切です。

## 6. 話し方やとり（3） わかりやすい話し方



話す人を見つけて、視覚をとって話を読み取ること（読話）は、子供たちにとって大変苦勞することです。その負担を少しでも軽くしてあげるために、ろう学校の教師は子供たちにとってわかりやすい話し方を工夫しなくてはなりません。

わかりやすい話し方を工夫するために、ろう学校で気を付けたいポイントをいくつか紹介します。



### ①見通しを持たせる

内容の組み立てが曖昧なまま、延々と続く話を聞き続けるのは大変苦痛です。それは、どんな話が、どれくらい続くのか、見通しがもてないからです。

「今から、往復の途中や会場に着いてから注意することを5つ話します。ひとつ目は・・・」などのように、初めに話の全体を説明しておく、今いくつ目の話なのかがわかり、話を聞く子供たちに見通しを持たせることが出来ます。



### ②話すときの文の長さにも注意が必要です

話すときの文が長過ぎることも、話をわかりにくくする要因です。聞いてなかなか文末が現れないような長い文は、読み取りづらだけでなく、結局何が言いたいのがうまく伝わりません。少し短めに文を区切って話す方が、読み取る際の負担が軽くなります。



### ③絵や写真の提示、話題の工夫

言葉で説明するだけでなく、絵や写真を提示したり、子供の知っている話、興味もてる話題から入ったりすることで、子供の発言を促すことが出来ます。教師から一方的に話すのではなく、いろいろと子供たちに問いかけて、子供たちとやりとりをしながら説明を進めるとよいでしょう。発見や驚きを大切に共感的に話すと、より一層やりとりが活発になるでしょう。







#### ④「分かりました。」の真意

子供たちに「分かりましたか？」と聞き、「分かりました。」と元気に答えても、子供たちが本当に分かったとは限りません。もしかしたら、「分かりましたか？」と言った教師の言葉がわかっただけかもしれないのです。

子供たちは、たとえあいまいな理解でも「分かった」ような表情やうなづきをしていることがあります。ろう学校の授業では、教師の説明や友だちの発言を本当に理解できているか、確認しながら進める必要があります。



#### ⑤授業では、「押さえ」がとても大事です

子供たちが「分かりました。」と答えたときに、もう一度子供に言わせて確認します。一見くどいやりとりのように思えますが、子供自身の言葉で話をさせることで、子供が本当に理解できているかを確認することができます。

このように、本当に理解したかどうかを確認することを「押さえ」と言います。ろう学校の授業では、この「押さえ」がとても大事です。



#### ⑥教師は教室内のやりとりのキーステーション

教師が説明しているときに突然子供が質問したり、発言したりすることがあります。しかしその子供の質問や発言は、周りの子どもたちには理解できません。その発言にそのまま応じてしまうと、周りの子どもたちは話がわからなくなってしまいます。

そんなときは、突然の質問や発言を上手に拾って他の子供たちにも伝えてあげます。このように教師が教室内のやりとりのキーステーションとなって、すべての発言の内容がすべての子どもたちに伝わるように、話を展開していく必要があります。





## 7. 話し方やとり（4） 言葉の使い方に気を付ける



目で見ても意味が確かめられないような言葉の理解は、ろう学校の子供たちにとって難しい課題です。しかし、私たちは日常のやりとりの中で、知らず知らずのうちに、子供たちが理解できないような難しい言葉を使ってしまいがちです。授業においても、このような理解しづらい言葉を、当然分かっているものと思い込んで通り過ぎてしまうと、その後の学習が理解できなくなってしまうことがあります。

「脅かされる」などという言葉も理解しづらい言葉の一つです。



限られた授業時間に、理解しづらい言葉をすべて取り上げることは不可能です。しかし、その後の学習の理解に必要なと思われる重要な表現は、あえて立ち止まってでも言葉の意味を確認する必要があります。話の前後関係などから言葉の意味を予想させると、子供たちの知識や理解力を知る手がかりになることもあります。

授業でのやりとりや教科書に出てくる言葉の中で、子供たちにとって理解しづらい言葉をあらかじめ選び出して、分かりやすく説明できるように準備しておくことは、教材研究の際の重要点です。



子供たちにわかる言葉を使うだけでなく、常に新しい言葉を教えようとすることも大切です。

新しい言葉を教えるときには、子供にとってわかりやすい、身近な例文を示してあげるとよいでしょう。言葉の意味が理解できないと予想されたとき、どのような身近な例を出せばよいか、考えておくことが大切です。言葉と意味を1対1で対応させるだけでなく、いろいろな例文や様々な場面でその言葉を実際に使っていくことで、使い方を覚え、言葉の概念を豊かに育てることが出来ます。



「ふさわしい」と言う言葉も、ろう学校の子供たちにとって理解しづらい言葉の一つです。

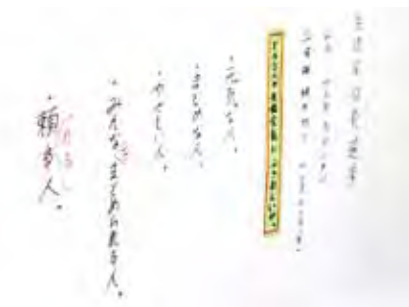
ここでは、「どんな人が生徒会長にふさわしいと思いますか？」という問いに対して、意味をうまく理解できない子供たちが、「自分がやりたい。」「〇〇君がいい。」というようにずれた回答をしています。

このように一つの表現で伝わらないときのために、別な言い方や噛み砕いた表現をあらかじめ考えておくことが大切です。



「どんな人が生徒会長に合っているかな?」「どんな人に生徒会長になってもらおうと嬉しいかな?」など、いろいろな表現で言い換えてあげると意味がつかみやすくなります。

また、「かっこいい人」「足の速い人」などと、教師がわざと間違った例を出して、子供の意見を引き出すのも一つの方法です。使う使わないは別に、子供たちの実態やいろいろな場面を想定して、子供たちへの問いかけや例文などを用意しておくといいでしょう。



子供の発言には言葉の間違いが多く見られます。答えの内容は正しいけれど、助詞の使い方や言葉遣いを間違えていることがよくあります。そんなときは、子供の発言を温かく取り上げながら、さりげなく正しい表現に直して確かめていくことが大切です。できれば、どこが間違っていたかが一目で見てわかるように、板書に示してあげると良いでしょう。



生徒会長にふさわしい人として「みんなをまとめられる人」という答えは、一見何の問題もないように思われます。しかし、「みんなをまとめる」というのは具体的にどのようなことをすることでしょうか。

「みんなをまとめられる人とは、どんなときに、どんなことをする人のことだと思いますか。」と、具体的な例をあげさせることで、抽象的な言葉の意味を確かめるのも一つの方法です。子供たちが抽象的な言葉で説明したことをそのまま終わらせずに、具体的な意味や行動に置き換えて確かめていくことが大切です。



ろう学校の子供たちに共通してみられる言葉の課題を知っておくことも有効です。目に見えないものや抽象的な概念の理解、助詞の使い方や語順の間違い、「チャンスをつぶれた。」などの自動詞・他動詞の使い分けなどの他にも、ろう学校の子供たちに特徴的な課題がいくつかあります。

このような課題を知ることで、子供たちの間違いやすいところに気付いてあげることができ、事前に問いかけや例文、教材などを準備することができます。

## 8. 教材・教具（1） 実物・文字カード・写真



授業において、どんな教材を用意するか、更に用意した教材をどのような順序でどのように使うかは、重要なポイントです。聴覚からの情報が制限され、視覚情報が重要な位置を占めるろう学校の授業では、なおさら教材の重要性が増します。

ここでは、幼稚部の授業を例に、実物、文字カード、写真等の教材の使い方について解説します。

### ①実物の提示の仕方

幼児や低学年では、実物を用意できるものは、可能な限り用意し、教材として有効に活用しましょう。

実物を教材として使うとき、ただそのまま見せるのでは効果が半減します。

幼児や児童の注意を十分ひきつけてから見せることで、子供たちの興味・関心を高め、その物に対する印象も強く残り、また、話し合いも深まり、学習効果が上がるでしょう。

ブラックボックスは、注目させるための工夫の一つです。

この授業で使っているブラックボックスは、幼児がのぞいてしまうのを防ぐため、横から手を入れて触るように作られています。意図したとおりに授業を進めるための配慮です。また、幼児が親しみやすい色を用いています。小学生であれば、ブラックボックスの名の通り黒い箱や袋でもあまり抵抗はありませんが、黒い色では怖く感じてしまう幼児もいることに配慮しています。更に、「？」のマークを使うことで、「なにかな」「なんだろう」「わからない」という概念が、この「？」マークで表されることを教える意図もあります。一つの教材を作るにも、様々な側面から考慮されていることがわかります。

実物を提示する方法としては、布などで覆って隠しておき、部分的に見せる、袋やポケットから出して一瞬だけ見せる、などがあり、幼児・児童の興味をひきつけ、考えさせるためによく使われます。



### ②実物を使った話し合い

実物を使うことで、五感を使った話し合いが広がります。視覚のみならず、触覚、嗅覚なども働かせた、豊かな話し合いとなり、言葉も広げていくことができます。

この授業でも、「かたいよ」「石かな?」「ごろごろしてる」など、いろいろな言葉が子供たちから出てきました。また、「ざらざらしてるね」など、子供たちがまだ知らない言語表現を教えるチャンスも生まれていました。



### ③文字カードの使い方

ろう学校では、聴覚からの情報を補って正しい日本語を獲得させていくために、幼児期から実態に応じて文字カードを活用するケースが多く見られます。手話でのやり取り、指文字と音声での確認、更に文字での確認へと進めることにより、正確な日本語の獲得が可能となっていきます。

文字カードは目的に応じていろいろな使い方があります。a) 見せる、b) 読ませる、c) 覚えさせるなど、意図的に使い分けていきましょう。







a) 見せる 普通に見せるだけでなく、単語を一文字ずつ見せていくように提示し、興味をもたせる方法も有効です。

b) 読ませる 音声と指文字を併用して読ませることで、正しく覚える練習となります。

c) 覚えさせる 数回読ませた後、文字カードを裏返して文字を隠し、覚えたかどうか確認する。また、裏返すと□□□□□と文字数のみが示されていて、そのヒントを見せて答えさせるなど、いろいろな使い方ができます。工夫してみましょう。



#### ④ 5Wのカード

いつ、どこ、だれ、なに、どうの5Wは、言語指導の基本事項です。

過去に経験したことを、筋道を立てて相手にわかりやすく話させるとき、また、簡単な作文を書かせるとき、5Wのカードを使って、幼児・児童の頭の中を整理し、話や作文の内容を整えていくのに有効です。また、これから行う活動や行事について、この授業のように、5Wのカードを使って板書にまとめていくことは、幼児・児童がイメージをもちやすくなり、見通しをもって活動できることにつながります。5Wの概念をまだはつきりともっていない場合には、このカードを使った話し合いの経験を積み重ねていくことにより、徐々に5Wの概念を獲得していくことを目指します。

こちらの学校では、5Wカードの色分けをして、幼児・児童がイメージしやすくしています。掲示物にも共通の色を使います。使用する色は学校や地域で統一しているところが多いようです。



#### ⑤ 写真の活用

写真は、経験を思いさせ、話し合いの材料とするのに有効な教材です。プレゼンテーションソフト等を使って、大型ディスプレイで文字とともに提示することも有効です。

この授業では、幼児が食べたことがあると思われるものと、食べたことがないと思われるものの両方の写真を用意して、話し合いに活用しています。このことにより、話題が広がっています。

写真をプリントアウトする場合には、グループの全員がよく見える大きさにすること、カラー印刷にすることなどの配慮をして、幼児・児童の興味をひきつけるようなものにすることが大切です。



#### ⑥ 宿題について

学習した後、幼児であっても、学習した内容の確認や言葉の定着をねらって、宿題を出すことがあります。左の写真のようなプリントです。ひらがなを読むことはできるけれども、まだ自分で書くことができない幼児向けには、左端にある文字を切り取って、マスに貼るような工夫がされています。

幼児本人の学習のためだけではなく、学校での学習を保護者にも知ってもらい、家庭でも学習内容について話し合ってもらいたいもあります。幼児・小学部低学年の場合はこうした家庭での復習・協力が、言葉の力を伸ばしていくために不可欠です。





## 9. 教材・教具（2） 文字カード・絵カード・お面



次に、小学部の国語の授業を例に、文字カード、絵カード、お面等の教材の使い方について解説します。



### ①教材文の提示方法

国語の授業では、教材文を児童が同時に見て授業を進めることができるように、模造紙に本文を書いたものや拡大コピーしたものを黒板に貼ることが多くあります。こうすることにより、児童は、今、先生や友達がどこを読んでいるのか、どの部分について話し合っているのか、常に確認しながら授業に臨むことができます。児童の手元の教科書のみで進めようと思うと、児童が手元を確認している間に話が進み、二度、三度と説明することになったり、分からないまま授業が進み理解できなくなったりすることが起こります。共通に見ることのできる教材文を準備することは、国語の授業の基本と考えましょう。



最近では、各教科書会社からデジタル教科書も発行されています。教室に大きなディスプレイかプロジェクターとパソコンを用意することができれば、教科書の各ページを大きく映し出し、本文も挿絵も、全員で一緒に見ながら授業を進めることができます。有効に活用していきましょう。



### ②文字カード・絵カードの活用

新しい言葉を覚え、定着させていくには、さまざまな工夫が必要です。授業のはじめに復習を取り入れたり、文字カード等で常に目に入る環境を作ったりすることも必要です。

この授業では、教材文の重要語句・新出語句のところを紙で覆って隠してあります。児童にその部分を考えさせながら読ませることで、確認・定着を図っています。教材文には、前時に学習した内容や傍線が書き込まれ、読みながら復習し、次の段落へとスムーズに読み進めていくための工夫がされています。また、名詞は黄色、動詞は緑、形容詞は水色等、色のルールを決め、その他の教材にあっても、共通して使うことで、児童が理解しやすいようにしています。



「だいじな言葉のコーナー」「覚える言葉のコーナー」などを作り、重要語句の文字カードとその意味を表す絵カードを貼っておく（吊り下げておく）と、児童がそこを見るとわかる、確認できるようになります。これは、授業中も活用できますが、その言葉を使う場面が、生活の中で出てきたときに、「あっ、こんなときに〇〇〇って言えばいいんだね。」と確認し、搬化していくことができます。新出語句は、このように日常生活の中で使うことで身に付きます。聴覚障害児の指導においては、教師が、常に言葉についての意識を高く持ち、授業中はもちろん、学校生活の様々な場面でも、子供の言葉の力を伸ばすための働きかけを積み重ねていくことが大切です。



### ③新出語句の指導

聴覚障害児は、同年齢の健聴児に比べ、獲得している語彙数が少ない場合があります。このため、学年相応の教科書を読み進めて学習していく際には、困難を伴うことが多いのが現状です。

国語では、本文の意味を正しく理解しないことには、読解は深まりませんから、新出語句、児童にとっての難語句についてはきちんと指導する必要があります。例えば、児童がつかずくことが予想される言葉について、あらかじめ学習しておくというやり方もあります。

この授業では、言葉とともに絵を提示し、まず、言葉の大体の意味をつかませています。その後、例文を示したり、例文を児童に考えさせたりします。また、動作化して意味を確認する方法、覚えさせたい言葉そのものを使ってやりとりする場面を設けて教えるなどの方法があります。

学年が進み、自分で国語辞典を引いて言葉の意味を調べることができるようになったとしても、辞書に書かれている意味を読んだり書き写したりしただけで理解できるとは限りません。先に述べたような、例文作り、動作化、言葉を使っのやりとり等の、具体的な学習活動を通して、語句の指導をすることが必要です。

授業で新出語句について学習したあとは、しばらくその語句の文字カードや絵カードを教室に掲示しておきます。繰り返しになりますが、学校生活のさまざまな場面でも使うようにする、また、短文作り等の宿題を出し、言葉の使い方を繰り返し学習させ定着を図る、などの取り組みを重ねてはじめて、1つの新しい言葉を指導したということになります。

このような言葉についての取り扱い、国語の指導に限りません。どの教科であっても、児童・生徒が知らない言葉が出てきたら、新出語句並の丁寧な指導をして、少しでも語彙力を高める工夫をしていきましょう。

### ④劇化・お面の活用

劇化させることにより、児童が本当に文章の意味を理解したかどうか確かめることができます。物語文で会話の場面が出てくる場合には、お面をつけて劇化させることで、誰が話している会話文なのか確認することができます。やらせてみてはじめて会話の主を間違っているとらえている児童がいることに気づくこともあります。また、実際に動いてみることで、読んだだけではわかりにくかった登場人物の気持ちが想像しやすくなるというメリットもあります。どんな表情でこの言葉を言っているのか、パッと動いたのか、ゆっくり動いたのか等、具体的に考えさせることで、物語の場面や登場人物の気持ちがイメージしやすくなります。児童も意欲的に取り組みます。このようにして、場面のイメージを正しくとらえさせ、共有することで、読解学習が深められ、楽しい国語の学習となっていくことでしょう。

この授業では、物の名前や位置を表す言葉などの理解が不十分な児童のために、模型も用意されています。児童の実態によっては、お面や挿絵のコピーだけでなく、より具体的な教材が必要になる場合もあります。児童の語彙力・理解力の実態を正しくとらえ、どんな教材が必要なのか検討していきましょう。

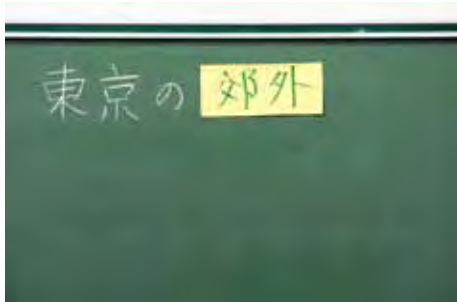


## 10. 板書の工夫（1）



授業では、黒板に書かれたものや掲示物からの情報がとても大切になります。聞こえる子供たちは教師の声から正確な情報をつかみ、学習内容を理解できます。ところが、ろう学校の子供たちは、そうはいきません。視覚から入る情報を手がかりに、考え、理解し、学習を進めます。ろう学校の児童・生徒は、聴覚を補う視覚がとても敏感です。

教科の学習内容を正しく理解させ、思考を深め、効率よく学習を進めるために、板書の工夫をしましょう。



### ①学習の主題を提示

本時に学習する内容がわかるように、学習の主題を書きましょう。また、今日は何について学習するのか、正しく理解させましょう。そのためには、まず、教師自身が本時の授業で、何を学習させ、何を児童・生徒に身につけさせたいか、明確なビジョンを持つことが大切です。



### ②見やすい字の大きさや色の工夫

小さな字、あいまいな色は見にくい場合があります。色の組み合わせで見えづらいこともあります。文字が薄くないか、蛍光色を多用していないか、字の大きさは適切かなど、児童・生徒の立場で、或いは、子供たちの席から見てどうか、授業前に確認しておくことも必要です。

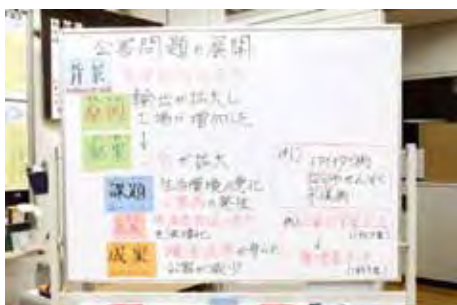
更に、読みやすいように、また、筆順を示すなど、できるだけ丁寧に書くように心がけましょう。



### ③言葉の定着

毎回使う言葉、大切な言葉などの文字カードの活用

カードを使うと言葉を視覚的に整理して表現できます。授業中のどこで、どのように利用するか、使い方を考えて文字カードを作りましょう。黒板の端の方を利用して、既習の重要な学習内容やキーワード等を並べておきましょう。また、別のホワイトボードや小黒板も活用しましょう。毎回使う資料やヒントとなるカードを移動式ホワイトボードに掲示し、重要な項目を小黒板で提示するなど、工夫しましょう。



### ④情報の整理

板書の整理に使うカードの活用

重要語句の整理や、内容のまとめの際、カード、色、形、大きさなどを工夫しましょう。いま何を考えなければならないかなどについて、板書からヒントを得ることもつながります。また、児童・生徒がノートに書きとった時に、わかりやすいノートになることを意識して情報を整理して提示しましょう。

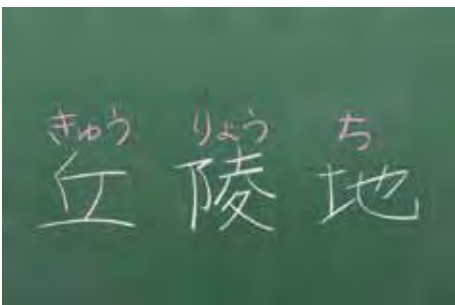
## 11. 板書の工夫（2） 色使い・図表化



### ①言葉を広げる工夫—言葉の確認

生徒たちはお互いの考えを、文字を使って確認するので、板書はすぐに消さないで文字を残しておきましょう。

音声情報が入りにくく、偏った言葉の使い方や誤った解釈をしている場合が多くあるので、授業に関係する言葉などを確かめ、言葉を広げさせましょう。黒板の片側にコーナーを作り、同意語や反意語、同音異義語を書きためていくこともあります。



### ②板書の色使いの工夫—言葉の読み方

間違った読み方をしている場合があるので、重要語句をはじめとして、読み方を確認する必要があります。読み方を意識させるために振り仮名を付けます。

都立ろう学校では振り仮名を赤字で書いています。



### ③筆順の確認

重要語句などを正しく書かせるために意識して筆順を見せましょう。よく使う言葉で間違いやすい漢字は、書き順を確かめることもあります。

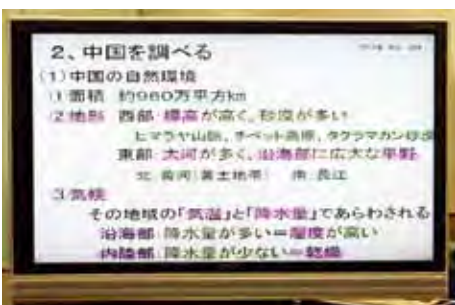
空書といい、指で空に書く方法もあります。

写真は、生徒と共に筆順を確かめながら板書しています。児童生徒の視線を集めることもできます。



### ④思考をつなげる板書

発問し、答えさせ、その答えを書き留め、さらにまた発展させ、学習内容を理解させていきます。はじめの内は、ややもすると一方的に教え込みがちになります。そこで、児童・生徒に考えさせる授業を展開するために、表や式、グラフ、手順を図解するなど、板書からヒントを得て思考し続けられるように計画していきましょう。



### ⑤重要語句の提示と関連性

重要語句はわかりやすく表示するように心掛けましょう。色の使い方や書き方、配置を工夫することにより関連性をわかりやすく提示でき分りやすくというのは大切な視点です。

写真では、覚えてほしいキーワードにアンダーラインがついています。また、使用している教材の重要語句は桃色、説明は黄色、地域・場所は緑色数字は青で表すなど工夫が見られます。また、同じ色の語句を追うことで、学習事項を整理していくこともできます。



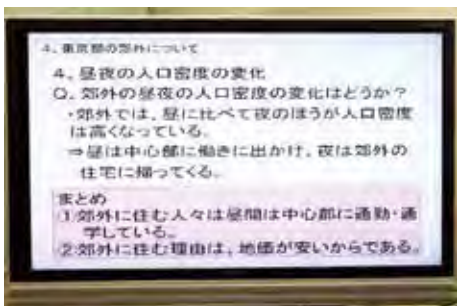
## 12. 板書の工夫（3） 板書計画



### ①板書したり、消すタイミング

黒板に文字を書きながら一緒に読ませる、黒板の字を消しながら重要語句や学習の要点を再確認させることができます。

字を書く、字を消すタイミングを工夫すると、視線を集めることができ、復習させたり、学習理解を強化したりすることができます。



### ②学習のまとめ

本時の学習の要点として、まとめの部分を囲んだり、色等でわかりやすくまとめる工夫をして、後で確かめられるように計画的に板書していきましょう。



### ③学習の過程を把握できる板書

ノート・家庭学習に活かせる板書

1時間分の学習が一目でわかるような板書計画を立て、わかりやすい板書をするように心がけましょう。また、板書したことはなるべく消さないようにし、授業を再現できるようにしましょう。



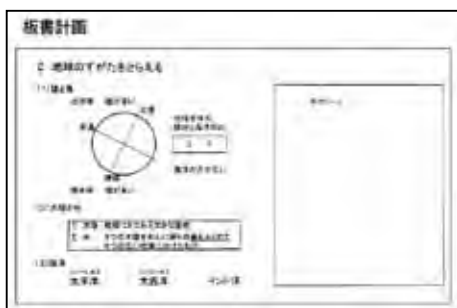
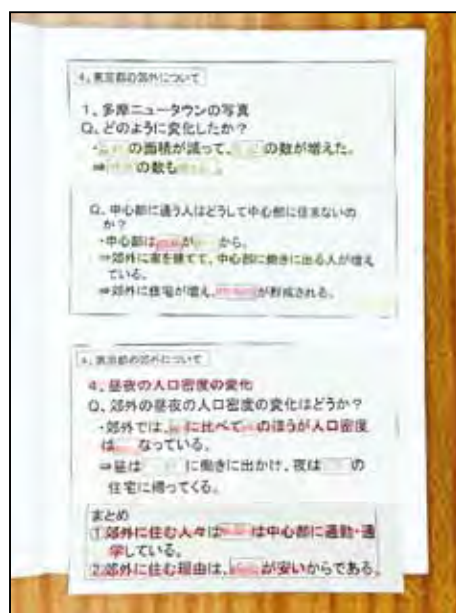
ノート例1

1時間の学習内容をわかりやすくまとめています。

文字の大きさ、読みやすさ、書き出しが揃っている、色づかい、絵や図などが入って分りやすい、関連する項目などがある、等々です。

ノート例2

モニターに示されたパワーポイントの教材をノートに貼り、生徒なりに分ける工夫を加えています。



④板書計画

板書で最も大切なことは、しっかりとした板書計画を立てて授業に臨むことです。板書計画の良し悪しが、授業の質につながります。きちんと計画することで、板書の内容や方法だけではなく、教材提示のタイミング、発問のポイントなど授業全体を見通せます。また、授業後の反省にも使うことができます。

日々の板書計画と反省の積み重ねにより わかりやすい授業が展開できるようになります。

## 13. 板書の工夫（４） PDP（プラズマディスプレイ）の使用について



黒板の隣にあるモニターがプラズマディスプレイです。最近と同様のもので液晶タイプやタッチパネル式のディスプレイも普及してきましたが、ここではいずれのタイプもPDPと表現します。

使用しているモニターは、50インチ、解像度1980×1080ピクセルのプラズマではなく液晶タイプのモニターです。解説の中で文字サイズ等の表現がありますが、50インチモニターを基準にしていますので各現場の状況の合わせて読み替えて下さい。では、PDPに文字や図、写真を写し出すときの注意や配慮する点について述べます。

### ①事前の準備

PDPを使用する時には、準備としてMSワード・一太郎などの文書作成ソフトやMSパワーポイントなどのプレゼンテーションソフトを利用して教材を用意しておく必要があります。さらに、インターネットと接続してあるPDPの場合、あらかじめ用意したURLで情報提示したり、授業で図や写真が突然必要になったときなど、検索した画像を活用して、生徒の理解を促せるので便利です。

事前の資料作成及びインターネットエクスプローラなどのブラウザの使用に当たっては、文字の大きさに注意する必要があります。

### ②文字が小さすぎる場合についての問題点

PDPの画面サイズやPDPと生徒達の距離に注意して適切なポイント数で文書作成ソフトやプレゼンテーションソフトなどに入力しておく必要があります。

写真のようにPDPと生徒達との距離が離れているのに、ノートパソコンに適した文字サイズでは、ほとんど生徒たちは読むことができません。目が疲れるとともに見ることに必死となり、授業そのものが成立しなくなってしまいます。

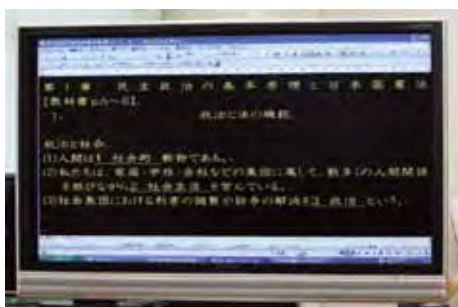
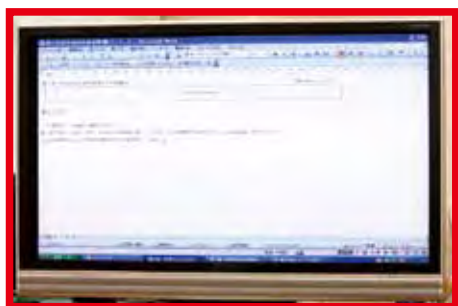
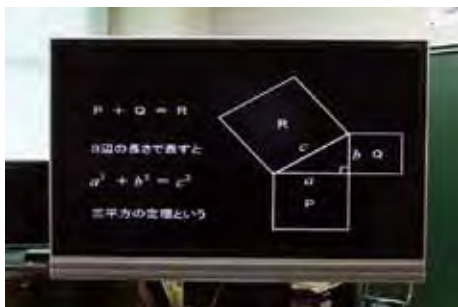
次に、画面の背景の色にも注意が必要です。白画面で黒文字、更に文字のポイント数が小さいと生徒達は画面の文字を読むことだけに集中してしまいます。

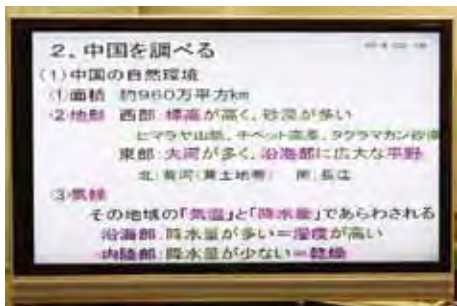
### ③最適化された表示の例

最下の写真は、適切な文字の色と大きさ、画面の背景色を指定したものです。背景を黒に、文字を黄色に、字の大きさは4cmから5cmくらいの大きさにすると見やすくなります。ただ、ディスプレイと生徒達に距離が離れれば、ポイント数を大きくする必要があります。字の大きさを大きくしすぎると画面に映し出せる情報量が減るので、授業内容、計画をしっかりとイメージしておく必要があります。

文書作成ソフトとプレゼンテーションソフトの例をあげます。

MSワード使用 24～28ポイントの例です。背景を黒にし、文字を黄色にすることで見やすくします。





MSパワーポイント使用 28～32ポイントの例

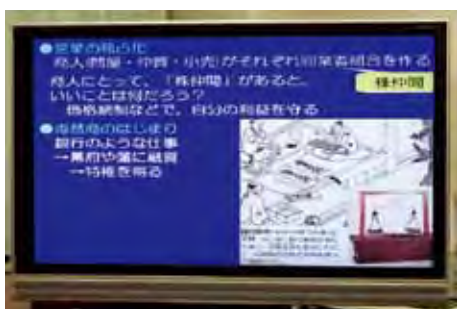
文字は色を使い分けると生徒にとってわかりやすくなります。



MSパワーポイント使用

背景を薄い黄色にし、黒文字を表示した例

字の大きさを4cmから5cmくらいの大きさにすると見やすくなります。この場合は、英単語1つ表示していますので、必要に応じて字の大きさを調整する必要があります。



MSパワーポイント使用 図や写真などを使った例

この場合は、教員と生徒の約束事として、人物名は○色、場所は△色、例えば歴史的イベントなどは□色としており、そのために青の背景と白文字を基調として作成しています。



普段なじみのある黒板の色を背景に使った例です。普段見慣れている色を背景にすることで、違和感がないようにしたのが工夫点であり、縦文字の場合は見やすくなるようです。

プレゼンテーションソフトを使い図や写真にアニメーション機能を使っています。説明する際、視覚に訴えて興味をひき起こしたり、印象づけたり、理解を促したりすることなどができます。ただ、あまり多く使いすぎると表示に時間がかかるだけでなく、集中力を欠いたり、何となく分ったつもりにさせている原因ともなるので、適度に使いこなしていくことにも注意が必要です。

大型モニターのほとんどが、画面の横縦比が16:9又は16:10になっています。教材作成する際のパソコン画面も同様の横縦比で作成することが望ましいです。

特にMSパワーポイントは、初期の横縦比が4:3になっているため、そのまま作成した資料を使用すると、横伸びした表示となり、大変見づらくなります。ただし、学校で普及しているビジネス用プロジェクターの横縦比は4:3ですので、PDPではなくプロジェクターを使用する際は初期設定で作成して下さい。パワーポイントの画面サイズ変更は、デザインメニューの画面設定で行います。



## DVD第3巻 実践事例ダイジェスト



第3巻では、全国のろう学校から寄せられた授業の様子を実践事例ダイジェストとして紹介しています。授業づくりの参考にいただければと思います。

大塚クラブホームページでは、本DVDで紹介している授業のポイント、指導案、授業者のコメントなどをご紹介・ご利用いただけます。また、一部授業はノーカットで授業を公開しています。

データは随時更新しています。DVD収録後にお寄せいただいた授業データも紹介していますのでご活用ください。

## 1. 福島県立聾学校



幼稚部5歳児 「話し合い活動」～おしょうがつ～  
指導者：齋藤智恵子（T1）高橋理恵（T2）

前日に門松作りをした幼児の絵日記から「お正月」の話題になった。門松だけでなく、鏡餅飾り、正月飾り、招き猫などの縁起物などにも興味を持ち、それぞれに持ち寄って見せ合う。話し合い活動では、門松のこと、一年の始まりのお正月、縁起物の名前、「一年」と新しいカレンダーなど話題が展開してきた。

「門松を持ち上げてみたい」という幼児の発想から、順番に持ち上げる。「重い・軽い」の言葉の意味と、「自分は力持ちだから、軽い」と友達に伝えたい気持ちを体全体で表現している。

体験を通して獲得してきた新しい言葉や表現は、子どもの気づきや思い、気持ちの動きと重なり、その場で一緒に驚いたり考えたりしながら、楽しくおしゃべりしていくことにつながっていくと考えている。



指導の目標

教師や友達と一緒に楽しく活動に参加する。

教師や友達からの働きかけに関心を向け、わかろうとしてきく。

気づいたこと、思ったことなどを、言葉や声、身振り、手話等を使って伝えようとする。

## 2. 福島県立聾学校福島分校



小学部第1学年 国語科  
指導者：三瓶伸江

想像を広げて読むには、書いてある言葉をもとに読むことができ、言葉の意味や内容が分かることが大切であると思います。そこで、読み取りの前に、分からない言葉や知りたい言葉を確認しました。言葉を動作化したり、ペープサートを動かしたりしながら、言葉の意味を丁寧に押さえました。やがては、自分で辞書を引き言葉を調べられるように、辞書に載っている形に言葉を直します。

自分がおじいさんだったらどう思うのかを想像し、発表しました。発表の意欲をもたせるために、吹き出しマークを貼りました。その後、動作化をしてイメージを更に膨らませおじいさんの気持ちを確かめながら、吹き出しに書く活動を行いました。文字に表現することが難しい時は、教師が言葉を教え、自分で書けるように支援をしました。



本時の目標

耳を穴にあてるおじいさんの様子を挿絵を手がかりに文中から抜き出す。

耳を穴にあてるおじいさんの気持ちを動作化し、吹き出しに気持ちを書く。

文章に出てくる言葉の意味を理解する。

### 3. 茨城県立霞ヶ浦聾学校



小学部1年 国語科 おはなしだいすき 「サラダでげんき」  
指導者 原けい子

「もえちゃん、立っていいよ。」～「せかせか」という動きには、「まにあつてよかった」に通じる気持ちが含まれている。動きにも気持ちが含まれていると感じとらせたいと考え、動作化することで、言葉の意味（動きの様子）を確認するとともに、どうして「せかせか」しているのかを考えられるようにした。早歩きといった表面上の動きではなく、急いでいるということを引き出し、「まにあつてよかった」と言っている気持ちにつなげるようにした。

・「まにあつてよかった」というアフリカぞうの言葉に書かれていない部分（何に間に合ったのか、それはどうしてなのか）を押さえることで、アフリカぞうが飛行機でわざわざやってきた理由を考えるようにした。

・動作化や話し合いから考えたことを本文の表現と結びつけることで、自分たちが考えたことが合っているということを確認した。

「アフリカぞうはどうやってりっちゃんの家に来たの？」～発問に対する答えが分からなかった児童には、友達の発言を聞くことで何を問われているのか知るようにしている。答えがわかった段階で、再度発問をして答えることで、問いと答えの関係が理解できるように支援している。

本時の目標

アフリカぞうの様子やしてくれたことを読み取り、これまでの登場人物との違いを考える。・話し合いを中心とした学習を通して、友達の意見と自分の



### 4. 群馬県立聾学校



高等部普通科3年 物理Ⅰ 光は波なのか 光波  
～反射、屈折して目に光が届き、ものが見える～  
指導者：黒田健次

答えが1つではない発問を用意し、子どもたちが自ら考える事を促すようにしました。最後の実験の場面では、Bさんが人形を鏡から離すとどうなるか確かめようとしていました。Cさんは作図して考えています。Aさんも人形を動かして考えようとしています。

ダイジェスト版の映像の後、Cさんが人形を鏡にくっつけ、Dさんが180°のところでも見えることを確かめました。

本時の目標

光が、直進や反射、屈折しながら目に届くことでものが見えることについて理解する。





## 5. 埼玉県立特別支援学校坂戸ろう学園



小学部1年 算数 くり上がりのたし算

指導者：加藤慶子

「ゲーム」

カードを順番に並べる。数字カード・タイルカード・ひらがなカード  
○ひらがなカードを選んでも、それがひらがなのか数字なのか迷う場合がある。

○11から20までのカードを選ぶか、21から30にするか確認する。

○3種類の中から1つを選び順番に並べさせ、それが数字・タイル・ひらがなのか確認する。

○分からない時は掲示物で確認させる。

本時の目標

たし算の場面を式に表し、タイル図や補助数字を書いたりして計算をする。

授業で大切にしていること

子ども同士の教えあい、やり取りが数多くある授業

分からない時に、自分で調べたり解決しようしたりすることができる授業  
生活の中で生かしていける授業



## 6. 東京都立大塚ろう学校



小学部4年 音楽 和太鼓「ぶちあわせだいこ」

指導者：赤司郁子

○リズム表現を楽しむためには、子供達に拍感（拍節を感じたり理解したりする力）が備わっていることが前提であると考え。○リズム視奏は、児童の実態に合わせて段階的に課題を上げている。シンプルな小節と交互に演奏させることで、テンポ感の維持を感覚的に身につけさせることを意図している。○教員が基本の拍を示したり、模範演奏をするときは体を大きく動かして、全身から拍を示すようにする。○リズムリレーは、リズムを1小節単位で捉える感覚、その小節がつながっていくフレーズ感を養うことができる。見よう見まねでただ感覚的にリズムを丸暗記させるのではなく、自分で考えて、拍数をカウントし、構造的に理解しながら演奏できる習慣を育てていく。○「ぶちあわせだいこ」は一つの太鼓を3人一組になって打ち上げていくために、掛け声やアイコンタクトにより呼吸を合わせていく取り組みが魅力的な題材である。西洋のオーケストラは、指揮者が中心にいてダクトを振り、それに合わせて奏者達が演奏するという形態であるのに対し、日本の伝統音楽は、集団で「気（呼吸）」を合わせて演奏するという違いがある。児童達に、そういった日本の伝統音楽独自の面白さを体験させたい。

本時の目標

「回転」の時の掛け声や、足の運び方を学習する。

顔を見合い、アイコンタクトを取りながら演奏する。





## 7. 長野県長野ろう学校



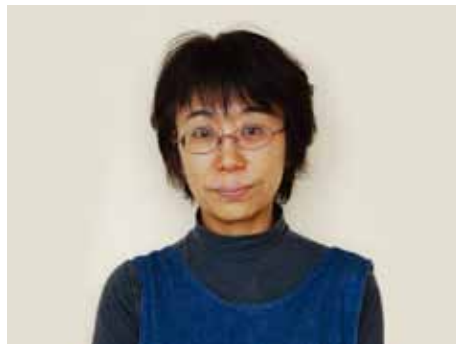
### 幼稚部5歳児学級 学級活動（読みがたり）

授業者：金澤美智代

- ・子どもからの表出はできるだけ受けとめて、正しい日本語にして返したり口声模倣を促したりする。
- ・友だちの表現を他の子がわからなかった時は聞き返すよう促し、まず子ども同士で手段や言い方を意識させてお互いの話が伝わるようにする。
- ・個々の語彙力の差によって表現が伝わりにくい内容の時は、教師が言い換えて確認するようにし、他の子ども達にも内容がわかるようにする。
- ・友だちの発言が理解できたかどうかは、教師が質問をして確認をする。
- ・全体で確認したい内容の発言は板書して、視覚的に残す。
- ・子どものイメージしたことは大事にするが、絵本の内容とかけ離れている時には、手がかりを示して正しく内容を理解するようにする。
- ・M児は、まだ傾聴態度に不安な面があるので、その都度声がけをして集中させる。
- ・S児は、STが無理しない程度に全体の活動に意識を向けさせたり、関連した本を見せたりして、同じ場で友だちを意識した活動ができるようにする。



## 8. 愛知県立千種聾学校



### 幼稚部3歳児 朝の会

指導者：服部真由美

#### 「絵日記を扱いながらのトピックス」

友達に対する関心が高くなってきたので、それまで個々に見ていた絵日記を、2学期に入ってから少しずつクラス活動に取り入れた。

絵日記を話す順番をじゃんけんで決める

絵日記を見ながら話す

再現遊びをする

#### 朝の会で心がけていること

元気な笑顔で親子を迎えること

子どもの様子の観察

毎日繰り返す活動の良さを生かすこと

同じ活動（呼名）に、少しずつの変化（時々話題）をプラスする。

本日は「乗り物の中で何がすき？」

先週バスに乗って遠足に行ったため「のりもの」を取り上げている。数日繰り返すことで、乗り物の種類が子どもからの表出できるようになってきた。

「何がすき？」と聞き合う経験をする。



## 9. 三重県立聾学校



小学部2年 国語  
指導者：海老原睦治

手話で読ませる。(意味が合っているか確認する。)

受身を含む文については指文字で読ませる。

「食べられて」の辞書形を確認する。→「食べられる」

「食べられて」をどう理解しているか手話で確認する。

「食べられる」の基の形を確認する。→「食べる」

「食べる」のグループを理由とともに確認する。→

2グループ→「る」の前の「べ」がエ段だから。

2グループの受身のルールを確認する。→ナイ形十られる

受身文を能動文になおす。(受身の対象がだれなのかを児童に意識させる。)

「大きな魚に食べられてしまうよ」と言った相手を確認する。

(受身の対象がだれなのかを確認する。)



本時の目標

スイミーと赤い魚たちの気持ちがわかる。

受身の活用ルールがわかる。

文章中の受身文を理解できる。

## 10. 奈良県立ろう学校



高等部2年 日本史B 尊皇攘夷から倒幕へ  
指導者：富山篤史

①本時の授業に入る前に前時までの学習内容を復習するように心掛けています。「安政の大獄」で処罰された人々の無念が「桜田門外の変」へとつながるように工夫しました。手話や文章だけではわかりにくい場面があることも想定されるので、身体表現を多く用いて説明しました。②「尊皇攘夷」について生徒がどう思うかを聞いている場面です。開国が決まりつつある情勢の中で、なぜ「攘夷」という考えが生まれたかを考えさせるようにしました。③「生麦事件」の場面です。時にはジョークも交えながら笑いを引き出す楽しい授業になるように考えながら進めています。また、できる限り、生徒に発表させる時間を多く取っています。その後、必ず生徒を褒め、こちらから具体例を挙げて補足説明をします。日本と外国の文化の違いやコミュニケーション状況など、その時その場をイメージさせながら説明するようにしました。④「薩長同盟」の場面です。薩摩の代表、長州の代表、仲介役を人物写真で掲示することで、わかりやすさを追求しています。⑤最後には本時のポイントをもう一度振り返り、まとめをします。「公武合体」の薩摩藩と「尊皇攘夷」の長州藩が連合したことで、「倒幕」という考え方が生まれてきたことを、紙芝居のような感覚でまとめました。その後は質疑応答に移り、意見交換をしたり、トリビアを出し合ったりすることもあります。

本時の目標

公武合体運動と尊皇攘夷運動の展開から、倒幕の過程が始まることを理解する。薩長同盟に登場する人物の考え方や生き方を理解する。



## 1 1. 和歌山県立和歌山ろう学校



小学部6年 自立活動(発音) 発音矯正 言語学習  
指導者：高下・中村・西上



○ポッキーを使った舌体操 学習の導入として、甘いお菓子を扱い、リラックスした雰囲気と、柔らかい舌作りをねらっている。児童どうしのやりとりの基、相手にきちんと知らせる、話を聞き取るように留意させている ○「母音」発音要領 発音学習の中で、基本となり最重要な「母音」練習を、児童自らが教師役となり学習を進めていくことで、よりいっそうの学習意欲の向上と意識付けを目指すようにしている ○「たてと」発音要領 上記と同様に、児童に発音要領を説明させている。「たてと」を確実にすることで、「か」「さ」「な」「ら」行への応用が容易になることが判明した ○指令文を見て教室移動児童からの誘導 発音学習の中では、文意を読み取って行動できることもねらっている ○個別学習① 発音専科「っ・ち」要領 単語読み 後半は個々の課題に応じた個別指導を行っている。毎週担当者がローテーションを行い、様々な視点からアプローチを行うとともに、授業後の反省・次回の取り組みへの連携を密にしている。発音専科教師は、単音・単語レベルを中心とした発音矯正を行っている ○個別学習② 担任 読解学習 言語学習面での課題を一番つかんでいる担任が、個々に応じた読解学習を行っている ○個別学習③ 新しい教師 教科書文の読み 相手に正しく伝える  
ろう学校が初めての教師にも、積極的に発音に指導に参加できる指導内容を工夫しながら取り組んでいる

## 1 2. 福岡県立小倉聴覚特別支援学校



小学部1年 国語 じどう車くらべ  
指導者：藤野和男



○一人の子どもが気づいたことを全体の子どもに紹介し、思考する上での手助けとなるようにした。○「トラックのつくり」といっても漠然としていて、なかなか読みとることが難しいので、子どもたちの思考を深めるために、「どのようにつくってあるか。」「何が着いているか。」ということに着目させ、表に具体的に示した上で本文中に線を引かせた。○すでに学習したバスや乗用車の仕事やつくりを常に対比させて考えさせることで、子どもたちの思考が深まるようにした。○「広い荷台になっている」ということに気づくことができた児童に対しては、重い荷物を運ぶときの工夫についても考えるよう考える視点を提示し、より高い目標を設定した。○発表の際、周りの子どもは必ず話し手の方を見るように注意を促した。また、発表する児童には、児童全員に伝わるように音声言語、手話、指文字などを使い分けやすく表現するよう、常に意識させた。○子どもの発表の内容を別の子どもに再度反復させるなどして、相互の話し合いを活発にしている。友だちの発表を聞いていないと困る場面を常に設定し、話し手に注目する学習態度を身につけさせている。○言葉の説明は「赤」、仕事に関することは「青」、「つくりに関することは、[緑]」など、書き込む内容を色分けして、拡大本文に分かりやすく書き込んだ。○拡大本文や拡大挿絵だけでなく、ミニカーなどの模型を使って、実際の様子をイメージさせながら理解を図った。○様々な特性の児童に対して、個別の声かけを行い、授業に集中できるように配慮して



### 13. 福岡県立福岡聴覚特別支援学校



幼稚部3歳児 劇あそび

指導者：永久誠司

本校幼稚部では、幼児の言語力の向上のみならず幼児同士のコミュニケーション意欲、能力の向上、あそびを通じた良好な人間関係の形成をめざし劇あそびを積極的に取り入れている。

題材選びの留意点としては、物語の内容が各年齢の幼児にとって適切であるかを見極めることが重要である。3歳児段階では繰り返しのあるシンプルな物語が適当であると考え。 (例「のせてのせて」「おおきなかぶ」「さんびきのこぶた」)

教師は幼児のモデルとして役になりきり、自分もやってみたいと幼児に思わせるような配慮が必要であろう。絵本の読み聞かせの段階からこの物語はおもしろい、やってみたいと思わせられればその後の活動も意欲的に行われる。本時では始めに教師が中心となって劇あそびを促し、次に幼児同士での劇あそびへと発展させている。教師があまりにも介入しすぎず、幼児の自然なやりとりを引き出すと同時に、発声や口声模倣もきちんと押さえるべきところは押さえるといったバランスが必要である。私自身このバランスをいかにとるか模索の日々である。



### 14. 福岡県立久留米聴覚特別支援学校



幼稚部 総合療育保育 「かがみびらき」

指導者：鶴 淳子

本校幼稚部では、毎年幼稚部3学年全員と乳幼児教育相談の子どもたちと親御さんと12月に餅つきをしています。その時、作った鏡餅を使って、新学期に鏡開きをしています。

鏡餅の飾りの由来などを子どもたちに話したあと、今年の目標をひとりひとりが発表します。冬休みの間、おうちの人と一緒に考えた運動や学習やお手伝いなどについての目標を発表し、ひとりずつ木づちで鏡餅をわっていきます。

子どもたちがみんなにきちんと手話や指文字、音声言語で伝えられるよう、立つ位置や表現の仕方、聴覚、視覚情報の保証などに配慮した指導を行っています。

鏡開きのあとは、すごろくやカルタ、福笑い、はねつき、こままわしなどのお正月の遊びをします。小さい子も大きい子もみんなが楽しめるように工夫や配慮をしながら遊ぶようにしています。

本時の目標

鏡開きの由来や意味を知り、鏡餅を割り、伝統的な行事に触れる。

ひとりひとりが今年の目標を元気に発表することができる。

友だちの話や目標カードをよく見て、理解しようとする態度を育てる。





## 15. 東京都立大塚ろう学校



小学部2年 国語 「お手紙」

指導者：島田静香

前時の新出語句と重要語句は隠しておき、正しく想起できているかを確認する。

想起できない子には大事なことばのコーナーで確認させる。

「大きい」「何か」「入れました」を正しく読めているかを確認する。

一人ひとりの理解状況を確認する。

かえるくんの行動を想起しながら動作化する。人形やお面を自由に選択させ、楽しい雰囲気の中で劇あそびを行う。

手話表現が正しくできているか確認する。



本時の目標

- ①かえるくんの行動を、順序に沿って読みとることができる。
- ②本文にでてくる語句について、意味を知り文の内容を読みとることができる。
- ③読みとった内容を人形劇や動作化で表現することができる。

## 16. 東京都立大塚ろう学校



幼稚部2年 保育 「さつまいもでつくろう」

指導者：角田敬子

先日、いも掘り遠足に行った。子どもたちは大きないもが出てきて、目を丸くして喜んでいて。家庭に持ち帰り、それぞれスイートポテトやてんぷらなど、調理して食べたことを絵日記を見せながら嬉しそうに話していた。今回は、学校で友だちと話し合いながら、一緒に調理を楽しみ、経験を共有したいと考え、この活動を設定した。できあがったおやつを持って、下級生と散歩にでかけるのも楽しみにしている。

ボックスを持ったり、穴から中に手を入れたり、中にあるものにさわったり、何が入っているのか考える。子どもたちが興味を持つように、大事そうに持ってくる。中になにかが入っていることを知らせ、安心して手を入れられるように、まず、保育者が手を入れて見せる。

子どもたちがどんな推測をしても、自分なりに考えて言えたことをほめる。

ふたを開けて、子どもたちに中にあるさつまいもを見せる。

遠足でさつまいもを掘ったこと、おうちで調理したことなど、思い出させる。いつ、どこで、だれが調理するか、板書して確かめる。

さつまいもを使った、いろいろなおやつの写真を提示する。提示したもの以外のものが作りたいといったときには、そのものの説明をさせて、絵を描く。



## 平成22年度 日本郵便年賀寄付金配分事業助成 聴覚障害児教育の専門性を担保するための指導者用教材DVD等制作事業

### 事業の趣旨

特殊教育から特別支援教育に変わって、旧養護学校や普通校からろう学校への異動者が増えてきました。旧ろう学校免許状も無く、ろう学校の勤務経験もない教員は、まず手話の世界に驚き、次に指導の壁に突き当たります。特別支援学校に勤務する教員は大変忙しく、新規採用やろう教育未経験者を育てる余力がないのが現実です。

本事業では、失われつつある聾教育の専門性を維持向上させることと、長年培ってきた技術や経験を、聾教育の専門家、ろう学校校長会等の協力を得て理想的な聾教育のモデルとして教材化し継承したいと考えるものです。

聴覚障害に関する事柄から、指導に当たっての配慮事項など、指導の現場ですぐに使えるような内容を心がけました。全国的にろう学校での専門性の維持は深刻な問題で、成果物の無償提供によって大きく改善につながることを期待しています。

私共NPO法人では、都立大塚ろう学校を拠点に聴覚障害教育支援を行ってきました。その過程で、前述の新規採用と聾教育未経験者も4月早々に担任を持たねばならず、何らかの対応が必要と考えました。この問題を置き去りにすると、聾教育の専門性が維持されないばかりでなく、聴覚障害児者の自立にも悪影響が出るのが懸念されるため、緊急に対策が必要と考えました。

多くの皆さまの協力で、本DVDと解説書を提供できます事、心より御礼申し上げます。

今回作成した教材は、都立ろう学校による実践を中心に、初級編としてまとめたものです。聴覚障害教育は、各ろう学校ごとに教育資産がありますし、先輩指導者が積み重ねてきた実績とともに、常に進化もしております。この教材も順次改訂、向上してまいりたいと考えています。

教材をご利用いただきご感想・ご意見をお寄せいただけましたら幸いです。

### 事業協力者

監 修 濱田豊彦 東京学芸大学准教授  
制作協力 全国聾学校長会  
東京都立ろう学校長会  
東京都立大塚ろう学校  
東京都立立川ろう学校  
東京都立葛飾ろう学校  
東京都立中央ろう学校  
授業ビデオをお送りいただいた先生方  
出演頂いた児童・生徒・保護者の皆様  
イラスト 藤永さとみ  
ビデオ制作 オフィスキューブ株式会社  
印刷 ホワイトウイングCo.

# 特定非営利活動法人聴覚障害教育支援大塚クラブ (略称：NPO法人大塚クラブ) について

## 会の設立

平成13年度、学校週5日制完全実施を機会に、子ども達の居場所作りの為に旧大塚土曜クラブの活動をスタートする。これを礎に、更なる活動基盤の強化と、新たな事業展開を目指して、平成17年NPO法人化を行う。

(平成17年8月認可設立)

## 会の目的 (定款より抜粋)

この法人は、聴覚障害児・者の福祉の増進・自立と、社会の理解によるノーマライゼーション社会の実現に寄与することを目的とする。

## 特定非営利活動促進法 (NPO法) 上の活動の種類

- ① 保健、医療又は福祉の増進を図る活動
- ② 社会教育の推進を図る活動
- ③ 子どもの健全育成を図る活動
- ④ 以上の活動を行なう団体の運営または活動に関する連絡、助言又は援助の活動

## 五つの事業

NPO法人大塚クラブでは、東京都及び近隣にお住まいの聴覚障害児者と保護者を対象に、教育支援、子育て支援、相談支援、聴覚障害教育、普及啓発の五つの事業を行っています。

一つ一つの事業がそれぞれ目的を持って、主体的な運営を行うとともに、子育て支援事業を中心に、個々の活動が連携し合って大きな支援の力になっています。

大塚クラブが、単一事業だけではなく広く聴覚障害児者のニーズ・社会の要請に応えていくことは、会の活性化につながっています。事業を展開していく中で、多くの企業や団体、学校、自治体との協力・連携が必要となってきます。同時に、それら協力・連携先からのオファーも増えてまいりました。

大塚クラブと大塚ろう学校、その他のろう学校、PTA連合会などの結びつきが強くなればなるほど、行政も注視するようになりました。また、本会も学校の希望及び行政の意向を伺いながら連携した運営を進めています。

## 事業内容

### (1) 教育支援事業

- DVD教材制作事業 (本事業/主催)
- ろう学校へのパソコンノートテイクカー派遣 (受託)
- 聴覚障害児者のための学習塾運営 (主催)
- SPP (Science Partnership Project) 講師派遣 (受託)
- 進路体験キャンプ (主催)

### (2) 子育て支援事業

- 都立特別支援学校における学校外教育支援推進事業
- 放課後教室・土曜クラブ運営 (共催)
- 北海道サマーキャンプ (主催)
- 長野スキーキャンプ (主催)
- BBC (Building Bridges for Children) プロジェクト (民間受託)

託)

### (3) 相談支援事業

- 家庭訪問による乳幼児教育相談
- 引きこもりや、情緒不安などに対応した教室運営

### (4) 聴覚障害教育事業

- 家族のための手話講座 (主催)
- ボランティア・一般向け手話講座 (主催)
- パソコンノートテイクカー養成講座 (受託)

### (5) 聴覚障害児・者理解のための普及啓発事業

- 言語指導ハンドブック・研究報告書などの発行
- ホームページ (ろう学校.com) の運営